

---

# ブリティッシュスタイルの ブラスバンドとは？

2019/09/20版

森末 吉彦

---



## この文書について

3 執筆の経緯と狙い

## ブラスバンド編成の知識を得たい

6 パートの分類と存在意義

25 フォーメーションとセクションの話

## ブラスバンドでカッコよく吹きたい

33 「音」について考えよう

44 楽譜通りに吹くとはどういうことか

74 時代によるスタイルの変遷について

## ブラスバンドの音楽を楽しみたい

79 著名バンドの紹介

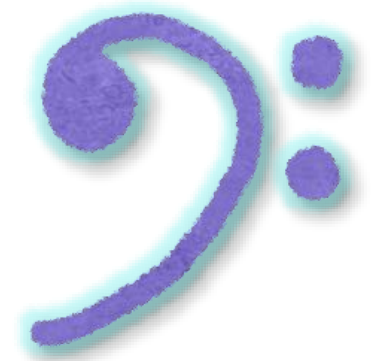
89 ブラスバンドのコンテスト

95 ブラスバンドの名曲たち



この文書について

# 執筆の経緯と狙い





ブリーズ・ブラス・バンドのコンサートで衝撃を受けてブラスバンドを活動のメインとするようになってから二十数年が過ぎます。当時はアマチュアのブラスバンドも東京を中心として数えられるほどしか存在していませんでしたが、その後数も増え、熱心なバンドもたくさん出てきました。素晴らしいことです。

しかし、国内のブラスバンドは数は増えていても、進歩していないのではないかと感じるようになりました。若いバンドはたくさんできてくるのですが、かつての私と同じ失敗を繰り返しているように思ったからです。

- 派手でテクニカルな楽曲を自慢げに演奏するだけの面白さに欠ける演奏をするバンド
- ブラスバンドは吹奏楽に対して優越するような挑発的言動で敵を増やすバンド
- 「スタイル」への無理解から始まる不自然な演奏をするバンド

責めるつもりはありません。かつて私も通った道です。しかし通らなくてすむなら通らなくていい道だと思います。

ブラスバンドは数が増えると言うことはそれだけ新しくはじめた人が増えていると言うことですが、ブラスバンドには標準と呼べるようなノウハウ本がありません。ノウハウを共有することで回り道をしなくてよいようにすることで、よりブラスバンドの魅力の深淵へ到達できる人が増えるのではないかと、新しい世界を魅せてくれるバンドが出てくるのではないかと考えました。

現在の私を共有することで二十年分のショートカットに成功し、新しい世界を魅せてくれる人が出てくることを期待して、本書を執筆しました。

2019年 森末 吉彦



この資料はブリティッシュスタイルのブラスバンドについての知識と経験の継承を目的として、まとめられたものです。

- 個人の経験を元にまとめられています。また、学術的な査閲は入っていないので、この資料の情報は参考にしつつ、より精度の高い信頼できる情報に到達するための踏み台にしてください。
- 特に言及していない場合、この資料においてはブラスバンドとはブリティッシュスタイルを指します。
- 日本の吹奏楽(特に中学・高校吹奏楽部)出身者がブラスバンドを理解する上で必要な視点を整理して記載しています。共通項の多い分野などは目新しさのない章もありますが、網羅性を重視して記載しています。目新しいことはないのだという確認に利用ください。
- 音名について、ドレミファソラシドは記譜音を示します。またCDEFGABは実音を示し、イギリス式の音名となりAとCの間の音はBとHではなくB $\flat$ とB、半音下げる記号は $\flat$ 、半音上げる記号は $\sharp$ を使用します。

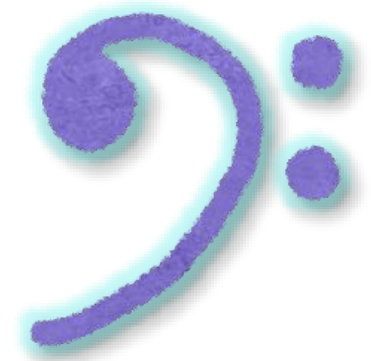
本書に関する権利は森末吉彦に帰属します。

非商用利用を条件に利用を許可された権利物を含むため、有償頒布することを禁じます。



ブラスバンド編成の知識を得たい

# パートの分類と存在意義





## ブリティッシュスタイルのブラスバンドって？



ブリティッシュスタイルのブラスバンドはその名前の通り、イギリスを中心としたヨーロッパ圏で熱心に演奏されている金管バンドの形態です。

およそ1800年ごろから次第に形ができあがり、コルネット、フリューゲルホーン、テナーホーン(アルトホルン)、バリトン、トロンボーン、ユーフォニアム、バス、打楽器からなるおよそ30人で演奏されています。

ほかのクラシック系の編成で広く用いられているトランペットやフレンチホルンといった楽器はあまり使用されていません。

座り方がコの字型になるといった所に特徴を感じる人もいるかもしれません。

王侯・貴族や教会の音楽から出てきた音楽というよりは、イギリスの労働者の余暇の音楽として発展したこともあり、地域や生活に根ざした活動が特徴的です。

そんなブラスバンドを、使用楽器と座り方の観点で見ていくことで、ブラスバンドを知っていきましょう。



## ブリティッシュスタイルのブラスバンドで通常使用される楽器と編成



楽器名	調性	記譜	通常人数	補足
ソプラノコルネット	E♭	ト音 in E♭	1	E♭管のトランペットで代替することもあります。
コルネット	B♭	ト音 in B♭	9	ショートコルネットのトリガー付が好まれます。
フリューゲルホーン	B♭	ト音 in B♭	1	ドイツには同名の別楽器があります。
テナーホーン	E♭	ト音 in E♭	3	日本とアメリカではアルトホルンとも呼ばれます。
バリトン	B♭	ト音 in B♭	2	バリトンホーンと呼ばれることもあります。同名の違う楽器がドイツほかにもあります。
テナートロンボーン	B♭	ト音 in B♭	1	ロータリーのないトロンボーンです。
テナーバストロンボーン	B♭	ト音 in B♭	1	1つだけロータリーのついたトロンボーンです。
バストロンボーン	B♭	ヘ音 実音表記	1	2つロータリーのついたトロンボーンです。
ユーフォニアム	B♭	ト音 in B♭	2	コンペンセイティングシステム付が主流です。
バス	E♭	ト音 in E♭	2	ブラスバンドではアップライトピストン式が主流です。
バス	B♭	ト音 in B♭	2	ブラスバンドではアップライトピストン式が主流です。
打楽器	-	-	3	ティンパニ、ドラムセット、その他打楽器と割り当てられることが多いです。





## ソプラノコルネット



ソプラノコルネットはブラスバンドの中で最高音域をカバーする金管楽器です。

音域が高だけでなく、明るく輝かしい音色でもあるため、吹くと目立ちます。

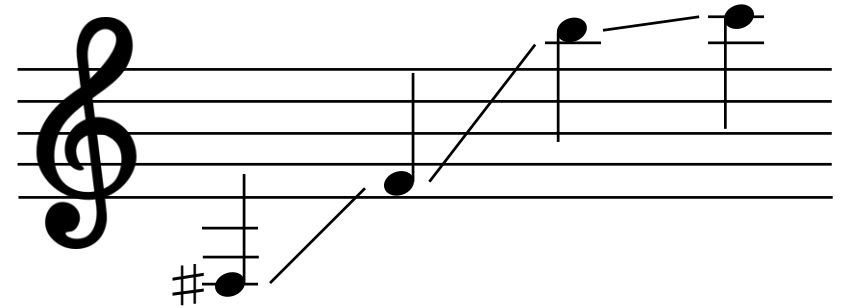
マウスピースレシーバーの部分がネジ固定されており、位置を調整することでチューニングします。

ほかのパートよりも比較的休みが多いです。しかし、ここ一番の場面で確実な演奏を要求される傾向にあり、輝かしい音色の最高音を演奏する技量と度胸が要求される過酷なパートです。

### 著名な奏者

- Kevin Crockford
- Peter Roberts
- Alan Wycherley

演奏下限   実用下限   実用上限   演奏上限



YAMAHA YCR-8620S

## コルネット



コルネットはブラスバンドの中で高音域をカバーする金管楽器で、最も多くの奏者が配置されます。

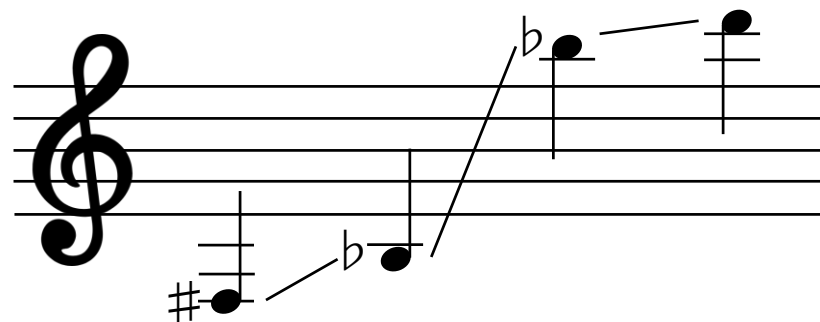
狭い口腔で、トランペットよりも「細く高圧の息」を深めのカップを持つマウスピースに一点突破するように吹き込むことで、艶やかで繊細なコルネットの音色が出ます。

しかしこのことは当の奏者にもあまり知られていないのでトランペット奏者がコルネットを吹くと息の圧力のせいで発音がかすれたり鈍くなったりし、ピッチのぶら下がった暗い音色になります。

### 著名な奏者

- Joseph Jean-Baptiste Laurent Arban
- Philip McCann
- Russell Gray
- Richard Marshall
- Roger Webster
- Philip Cobb
- 岡本篤彦

演奏下限   実用下限   実用上限   演奏上限



YAMAHA YCR-8335



## ホルネットパートの編成(1)



ホルネットパートは、ソプラノとあわせて次のように分類されているのが標準です。

### ■ 前列ホルネット(Front-row Cornet)

- プリンシパルソロホルネット
- アシスタントプリンシパルソロホルネット
- テュッティソロホルネット(2名)

主に旋律を担当

オーケストラの第一バイオリンに相当

### ■ 後列ホルネット(Back-row Cornet)

- ソプラノホルネット
- リピアノホルネット
- 2ndホルネット(2名)
- 3rdホルネット(2名)

主に伴奏を担当

オーケストラの第二バイオリンと  
トランペットに相当

前列のソロホルネットはバイオリンが演奏するような旋律を担当するため、繊細な音色とフレーズにあわせたビブラートが必須になります。

後列ホルネットは場面ごとに演奏の求められる役割・イメージが変わるため、ソロホルネットに寄り添うサウンドと、派手に輝かしく鳴らすサウンドとを柔軟に切り替えられる器用さが必要です。

なお、パート名として存在しない「1stホルネット」は機能ごとに分化してソプラノホルネットとリピアノホルネット、フリューゲルホーンになったものと考えられます。



## ホルネットパートの編成(2)



ホルネットパートは、救世軍のために描かれた作品では編成が異なり、次のように構成されているのが標準です。

- 前列ホルネット(Front-row Cornet)
  - ソロホルネット(Solo Cornet)
    - プリンシパルソロホルネット
    - アシスタントプリンシパルソロホルネット
    - デュッティソロホルネット(2名)
  
- 後列ホルネット(Back-row Cornet)
  - ソプラノホルネット
  - 1stホルネット(2名~3名)
  - 2ndホルネット(2名~3名)

ブラスバンドはどうしても音色の変化に乏しい編成であるため、高音を受け持つホルネットはミュートの演奏指示がたくさんあります。下記のミュートは用意していないと演奏できません。

- ストレートミュート
- カップミュート
- ワウワウミュート

詳細は別途ミュートのページを参照してください。



## フリューゲルホーン



フリューゲルホーンはブラスバンドの中で中高音域をカバーする金管楽器で、ソロを多く担当します。

マウスピースレシーバーの部分がネジ固定されており、位置を調整することでチューニングします。

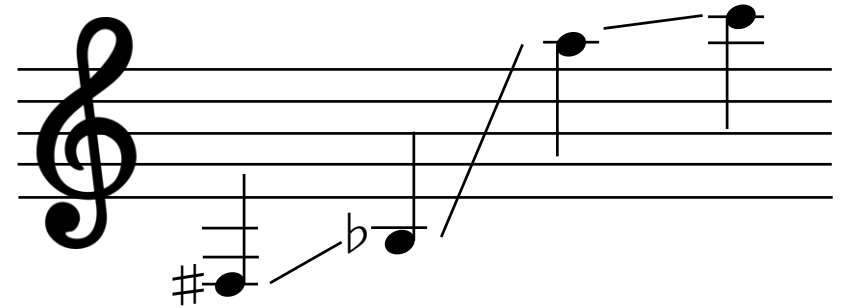
運指1+3の際にトランペットやコルネットではトリガーやリングを用いて抜差管で音程調整しますが、フリューゲルホーンにはその特徴的な音色を大切にするため、それらの機構を付けていないモデルが多くあります。音程には非常に神経を使って演奏する必要がある楽器です。

楽器を構えたとき、トランペットやコルネットはベルがピストンの左にありますが、フリューゲルホーンは右にベルがあるのが特徴です。

著名な奏者

- Iwan Williams
- Zoe Hancock

演奏下限 実用下限 実用上限 演奏上限



YAMAHA YFH-8315G

## テナーホーン



テナーホーンはブラスバンドの中で中音域をカバーする金管楽器で、ブラスバンドの音色を特徴付ける重要な楽器です。

楽器の改良がほかの楽器に比べて進んでおらず、楽器の形状がメーカー・時代によりバラバラです。また運指1+3の際に抜差管で音程調整する機構がついていないモデルがほとんどで音程も悪いです。

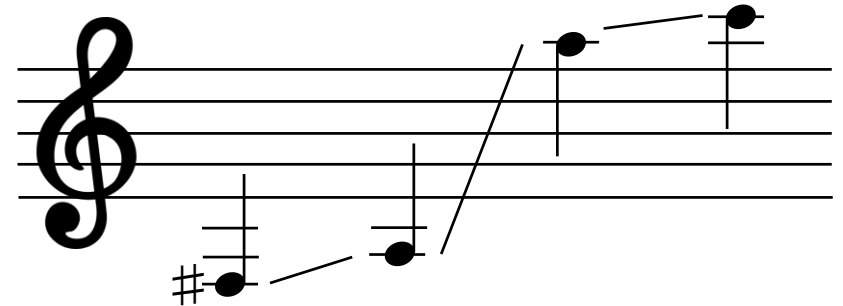
音程には非常に神経を使って演奏する必要のある楽器です。

狭い口腔で、速い息をぐっと吹き込むことで「みゅーん」と気持ち悪く響くのですが、このような音色の時に周囲とよく調和するテナーホーンらしい音色になります。

### 著名な奏者

- Sandy Smith
- Seona White
- Owen Farr

演奏下限 実用下限 実用上限 演奏上限



YAMAHA  
YAH-803S



## テナーホーンパートの編成



テナーホーンパートは、3名で構成され、次のように分類されているのが標準です。

- ソロテナーホーン(Solo Tenor Horn)
- 1stテナーホーン(1st Tenor Horn)
- 2ndテナーホーン(2nd Tenor Horn)

救世軍のために描かれた作品では4名で構成され、2ndが2名必要であることが多いです。



## バリトン



バリトンはブラスバンドの中で中音域をカバーする金管楽器で、テナーホーンとともにブラスバンドの音色を特徴付ける重要な楽器です。

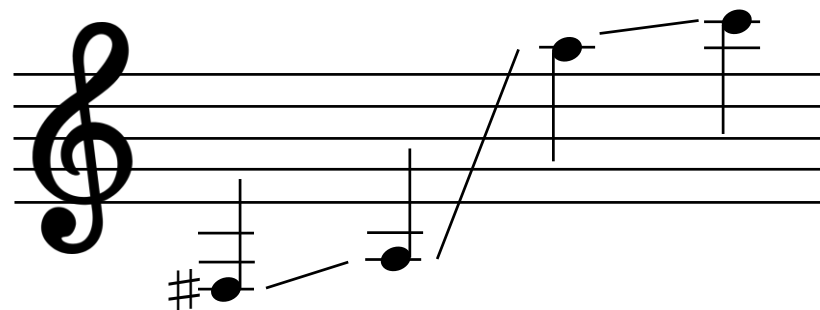
楽器の改良がほかの楽器に比べて進んでおらず、楽器の形状がメーカー・時代によりバラバラです。しかし運指1+3の音程補正のため、3番ピストン使用時にコンペンセイティングシステムが上級モデルには装備されています。4番ピストンを持つモデルもありますが主流ではありません。

テナーホーン同様、狭い口腔で、速い息をぐっと吹き込むことで「みゅーん」と気持ち悪く響きますが、このような音色の時に高音成分が豊かな周囲とよく調和するバリトンらしい音色になります。しかしユーフォニアムのように吹くとピッチがぶら下がり暗い音色になります。

### 著名な奏者

- Katrina Marzella
- Steven Booth

演奏下限   実用下限   実用上限   演奏上限



YAMAHA  
YBH-831S





## テナートロンボーン/テナーバストロンボーン



トロンボーンはブラスバンド唯一の円筒管主体の楽器であり、スライドにより完璧な音程がとれる中低音をカバーする金管楽器です。

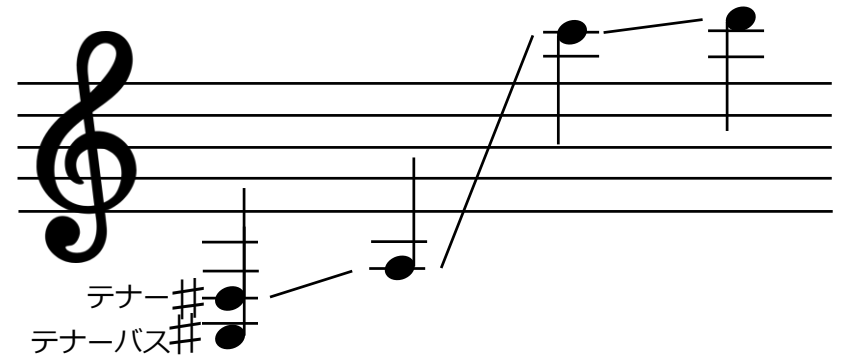
トロンボーンはほかの編成では八音譜表またはへ音譜表で実音表記されることがほとんどですがブラスバンドではほかの楽器との互換性からト音譜表の移調譜で記譜されます。

トロンボーンはいずれも右手でスライドを操作しますが、左手親指でレバーによるロータリー操作ができ低音域が拡張されているものをテナーバストロンボーンと呼びます。レバーを引くと管が伸びて調性がB♭からFに変わります。

### 著名な奏者

- Denis Wick
- Nick Hudson
- Brett Baker

演奏下限 実用下限 実用上限 演奏上限





## バストロンボーン



トロンボーンはブラスバンド唯一の円筒管主体の楽器であり、スライドにより完璧な音程がとれる中低音をカバーする金管楽器です。

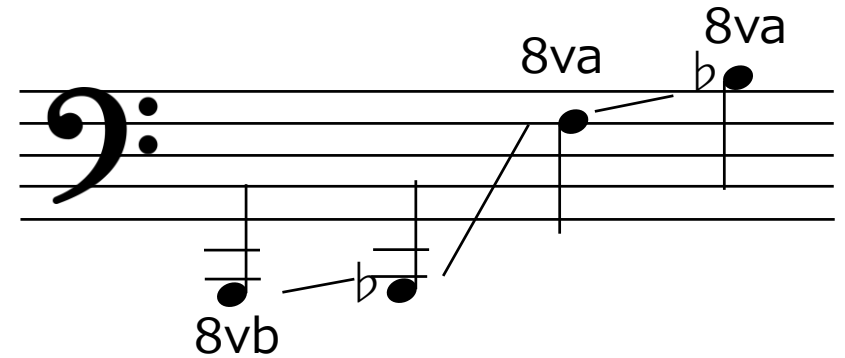
バストロンボーンはブラスバンドの中で唯一へ音譜表で実音表記されます。バストロンボーンの演奏音域を踏まえると他のトロンボーンと同じにすると下線が増えすぎて読みづらいからではないかと思われます。

左手親指、中指でレバーによる2つのロータリー操作ができます。2つのロータリーの配置関係により、インライン方式とオフセット方式があります。親指はテナーバスと同じくF管になりますが、中指は方式により異なります。

### 著名な奏者

- Adrian Hirst

演奏下限 実用下限 実用上限 演奏上限



YAMAHA YBL-830



## トロンボーンパートの編成



トロンボーンパートは、基本的には3名で構成され、次のように分類されているのが標準です。

- 1stトロンボーン(1名)
- 2ndトロンボーン(1名)
- バストロンボーン(1名)

1stトロンボーンについてはテナートロンボーンで吹くことが想定されており、F管レバーを必要としない楽譜になっていますが、実際の演奏はテナーバストロンボーンで演奏していることが多いです。

また高音への要求が厳しくバテやすいこと、ブラスバンドの観客側最前列でソロ演奏することも多いことから確実な演奏を意図して、1stトロンボーンをソロイストと伴奏に分けて負担軽減をしているバンドも多く存在します。

完全に調和した和音だけでなく、また最もはっきりした音色でパンチのある音を出せるので、曲のニュアンスにスパイスを効かせるようなフレーズが来ることがよくあります。

ブラスバンドのほかの楽器には出しにくい音色を活かすため、それを効果的にするため、舞台に向かって開き気味で座席を配置してやや舞台向きに座ることも多いです。



## ユーフォニアム



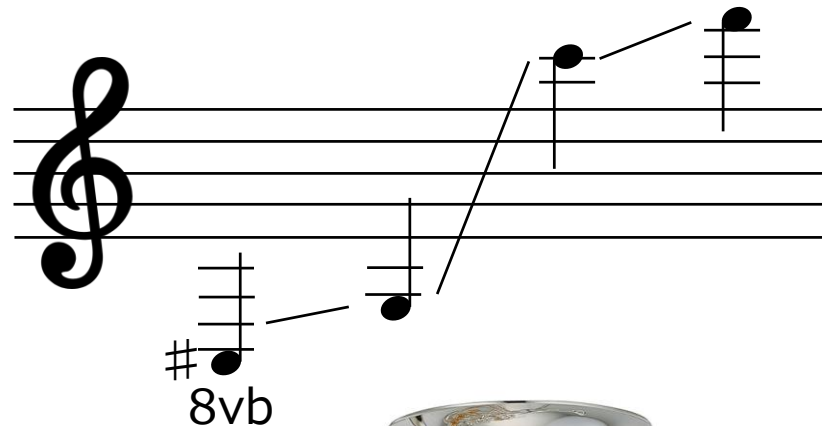
ユーフォニアムは高い機動性とよく響く音色で中低音の幅広い音域をカバーする金管楽器です。

運指1+3の音程補正のため、4番ピストンを持つモデルがほとんどです。4番ピストンと他のピストンを併用したときの音程と運指の改善のためにコンペンセイティングシステムが上級モデルには装備されています。主管トリガーが装備されたモデルもあります。ブラスバンドでは幅広い音域と機動力の高い演奏が臨まれるためコンペンセイティングシステムのついたモデルでの演奏が好まれます。

### 著名な奏者

- Robert Childs
- Nicholas Childs
- Steven Mead
- Derick Kane
- David Childs

演奏下限    実用下限    実用上限    演奏上限



YAMAHA  
YEP-842S



## バス



バスは太くてしっかりしたよく響く音色で低音をカバーする金管楽器です。一般的にはチューバと呼ばれる楽器ですが、ブラスバンドではバスまたはベースと呼びます。

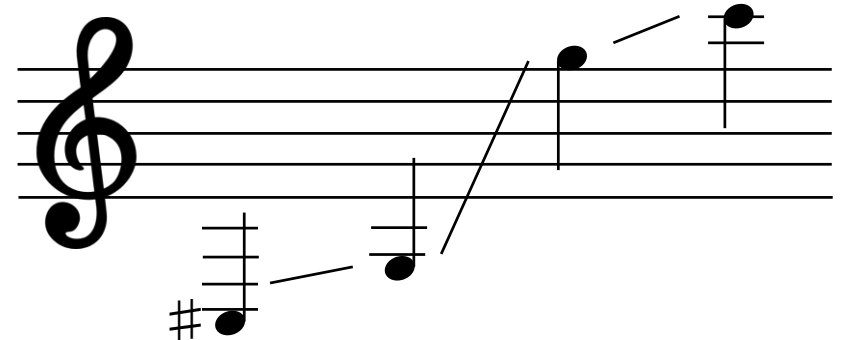
ユーフォニアム同様、運指1+3の音程補正のため、4番ピストンを持つモデルがほとんどです。4番ピストンと他のピストンを併用したときの音程と運指の改善のためにコンペンセイティングシステムや、5番バルブが上級モデルには装備されています。

ブラスバンドではほかの楽器と親和性の高いB♭管とE♭管の2種類が用いられ、機動力の高い演奏のためコンペンセイティングシステム装備のアップライトピストン式のモデルでの演奏が好まれます。

### 著名な奏者

- Øystein Baadsvik
- Simon Gresswell
- Ross Knight

演奏下限 実用下限 実用上限 演奏上限





## バスパートの演奏



バスパートは、基本的には4名で構成され、次のように分類されているのが標準です。

- E♭バス(2名)
- B♭バス(2名)

バスパートは最低音を担当することから、より演奏効果を高めるため、高度なブラスバンドにおいてはそれぞれの楽譜の指示にないオクターブ下のパートを追加してアドリブ演奏することが公然と行われており、特にB♭バスパートの2番奏者が1番奏者のオクターブ下を演奏していることが多いです。

バス奏者の間ではこれを「ペダリング」と呼んでいます。

ペダリングが上手く決まると、サウンドが低音方向に1オクターブ拡大するため、バスの倍音が強化されて安定感が増し全体のサウンドが豊かになる効果を発揮します。しかし、適正な音程で演奏できない場合はサウンドを不安定にして濁らせるため、高度で確実な演奏技術が必要です。



## 各パートのミュートについて



ブラスバンドはどうしても音色の変化に乏しい編成であるため、高音を受け持つコルネットにはミュートの演奏指示がたくさんあります。それと対向するトロンボーンパートにもミュートは多用され、下記のミュートは用意していないと演奏できません。

- ストレートミュート (ほぼすべてのパート)
- カップミュート (主にコルネットパート、トロンボーンパート)
- ワウワウミュート (主にコルネットパート)

また他の演奏形態に比べてミュートの使用機会が多く、バスを含むそれ以外のパートでもストレートミュートは必要になることが多いです。これらのパートのミュートは価格も高価であることが多いため、お金に余裕があるときに調達するか、借用先を開拓しておくことをおすすめします。

なおテナーホーンおよびバリトンについてはトロンボーン/バストロンボーン用のミュートが流用可能であることが多いです。

ミュートは音を小さくするというよりは音色を変えるために用いられることが多いので、特徴的な音色を大切にしつつ、音程と音量はしっかりと演奏する必要があります。





# 楽器の分類



ブラスバンドで使用される楽器を分類し、二次元の座標軸にマッピングすると次のようになります。(ベルの広がり方がわかりやすいようにサイズをそろえて適宜回転しています。)

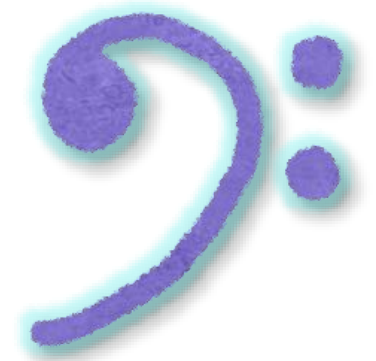






ブラスバンド編成の知識を得たい

# フォーメーションとセクションの話





## ブラスバンドのフォーメーションは一つではない



ブラスバンドのフォーメーションは「コの字型」でこじんまりと座るものが多いですが、よく研究すると必ずしも一つではなく、それぞれのバンドのサウンドに対する考え方、ポリシーが反映された興味深いものになっています。

おおよその論点は下記になります。

- コルネットセクションにフリューゲルホーンを含むか
- ホーンセクションにフリューゲルホーンやバリトンを含むか
- ユーフォニアムは独立セクションか、バリトンとのセクションか、バスセクションか

次のページ以降では論点となるパートの位置の特徴的な部分を赤丸で囲います。  
(特に前ページとの比較で違いがわかるように。)

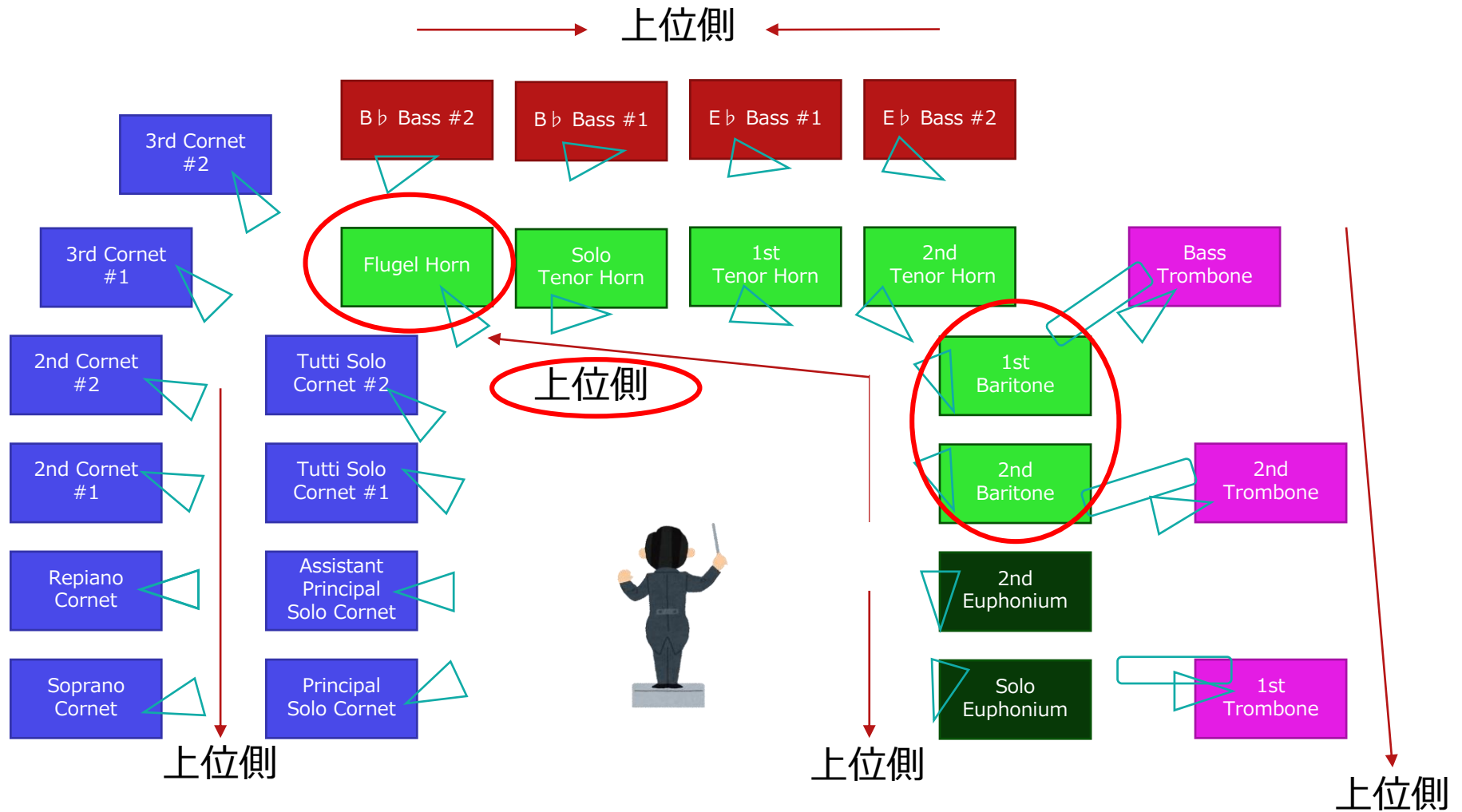
あと、どのフォーメーションを採ったとしても下記の「暗黙のルール」があります。

- 指示がないときは、どの奏者も指揮者に向かって吹く。(指揮者に音を集める。)
- ブレスはセクション内の上位奏者を優先し、全員が休まないようにずらしながら採る。

※ 特にブレスのとり方は特徴的なルールで、「Stagger Breathing」の指示はほかの演奏形態と違い、ほとんどありません。「指示していなくても、して当たり前」だからです。



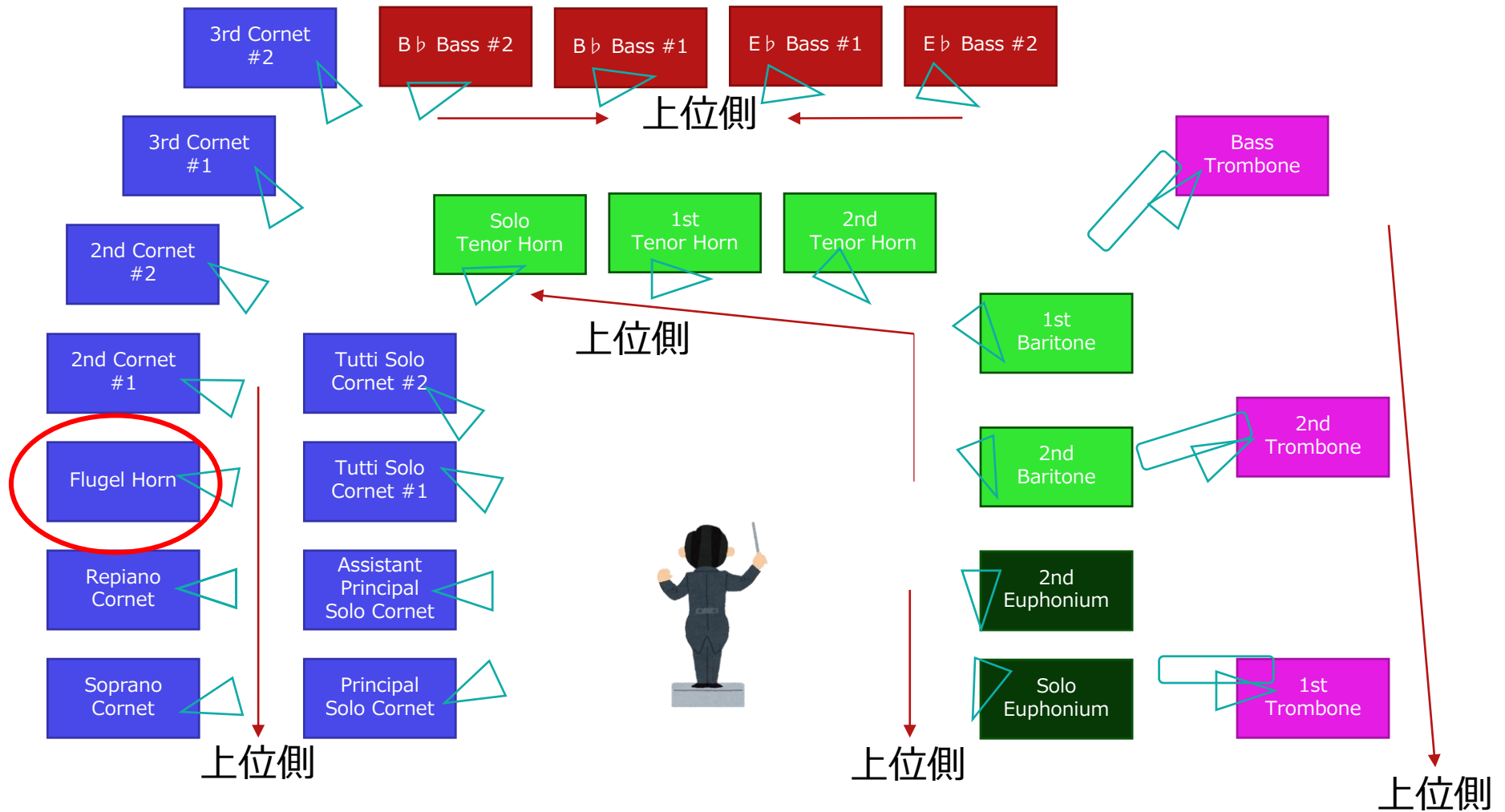
# オーソドックスな隊形(1)




※ この記号はベルの向きです。



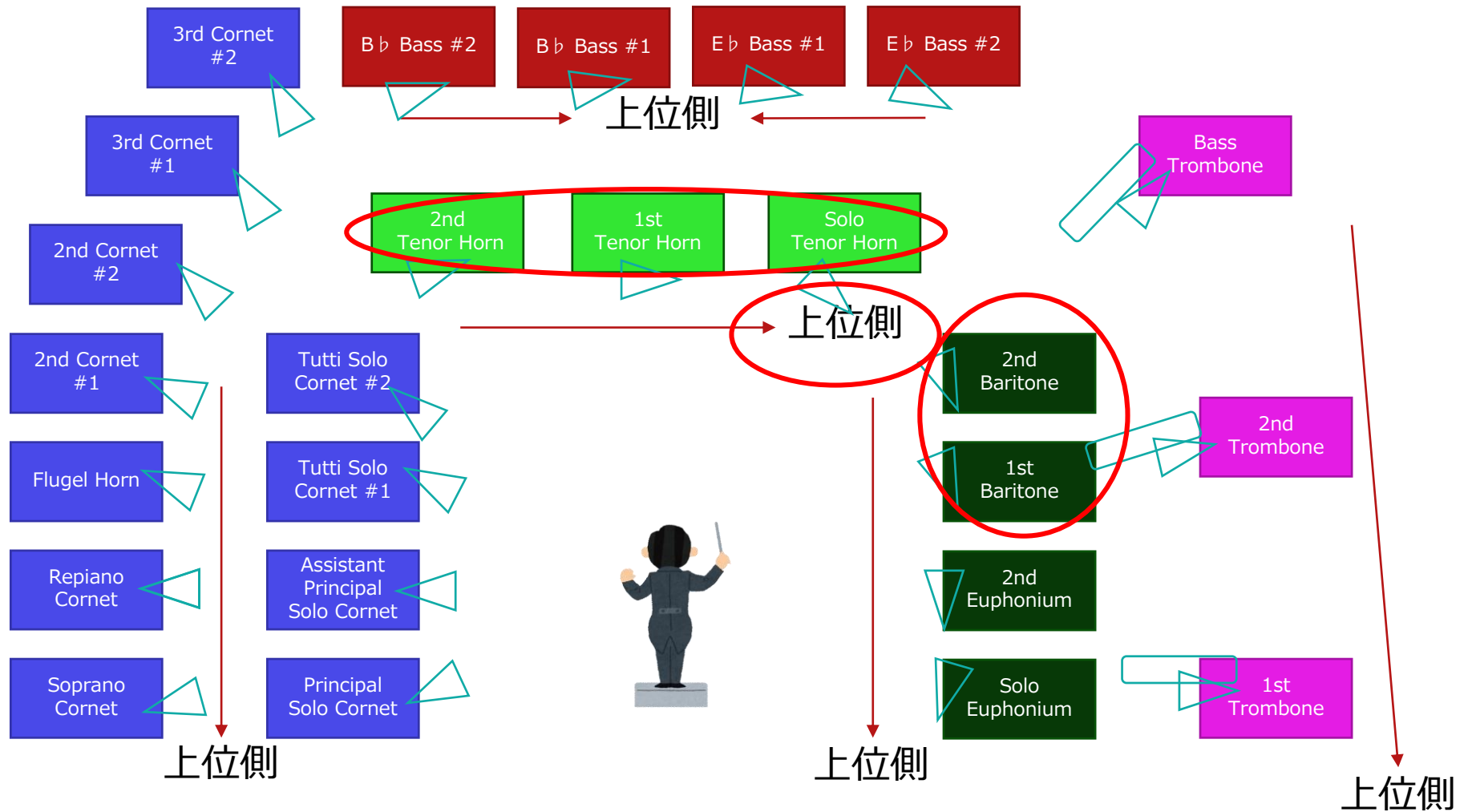
# オーソドックスな隊形(2)




※  この記号はベルの向きです。



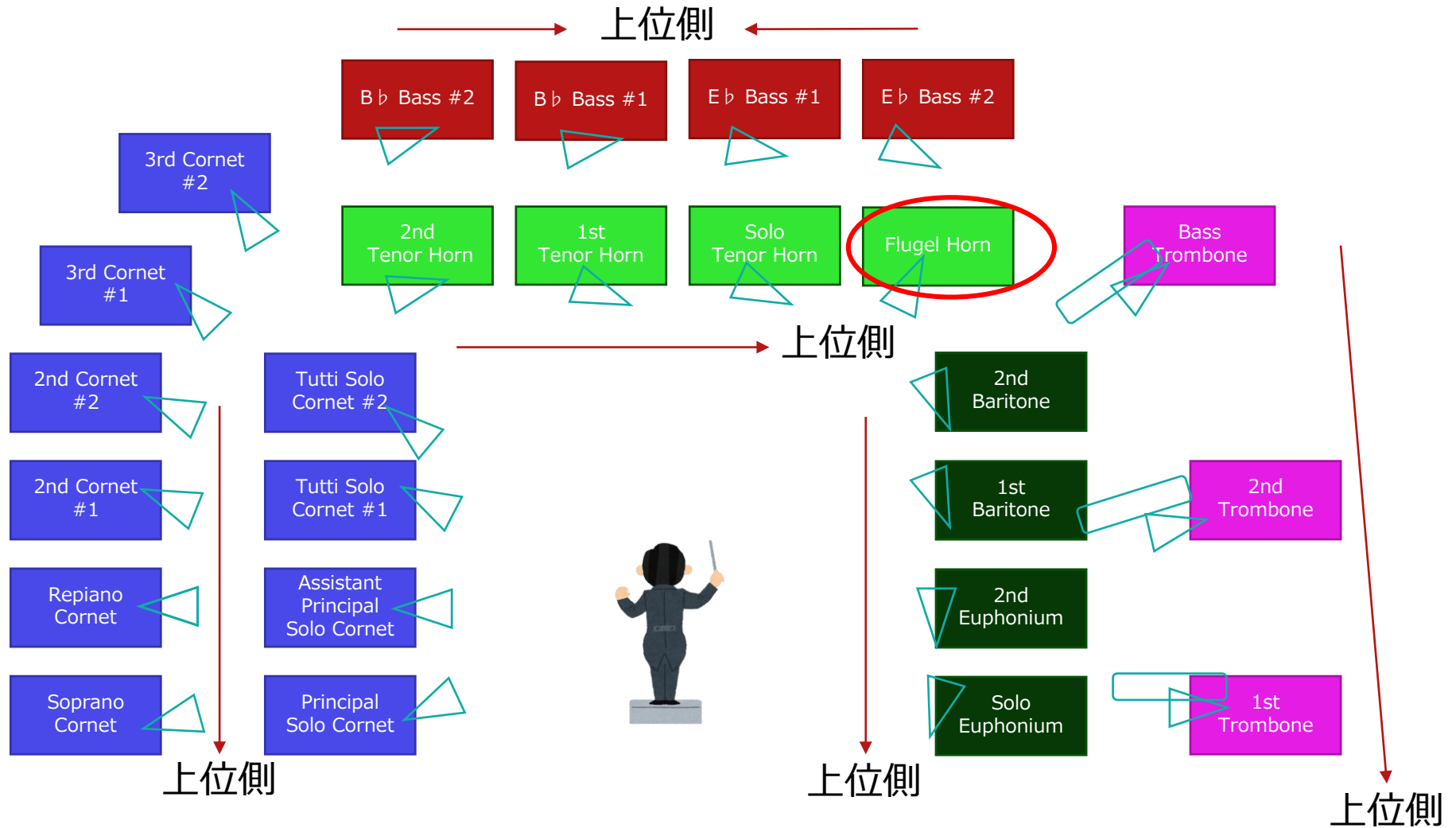
# オーソドックスな隊形(3)




※  この記号はベルの向きです。



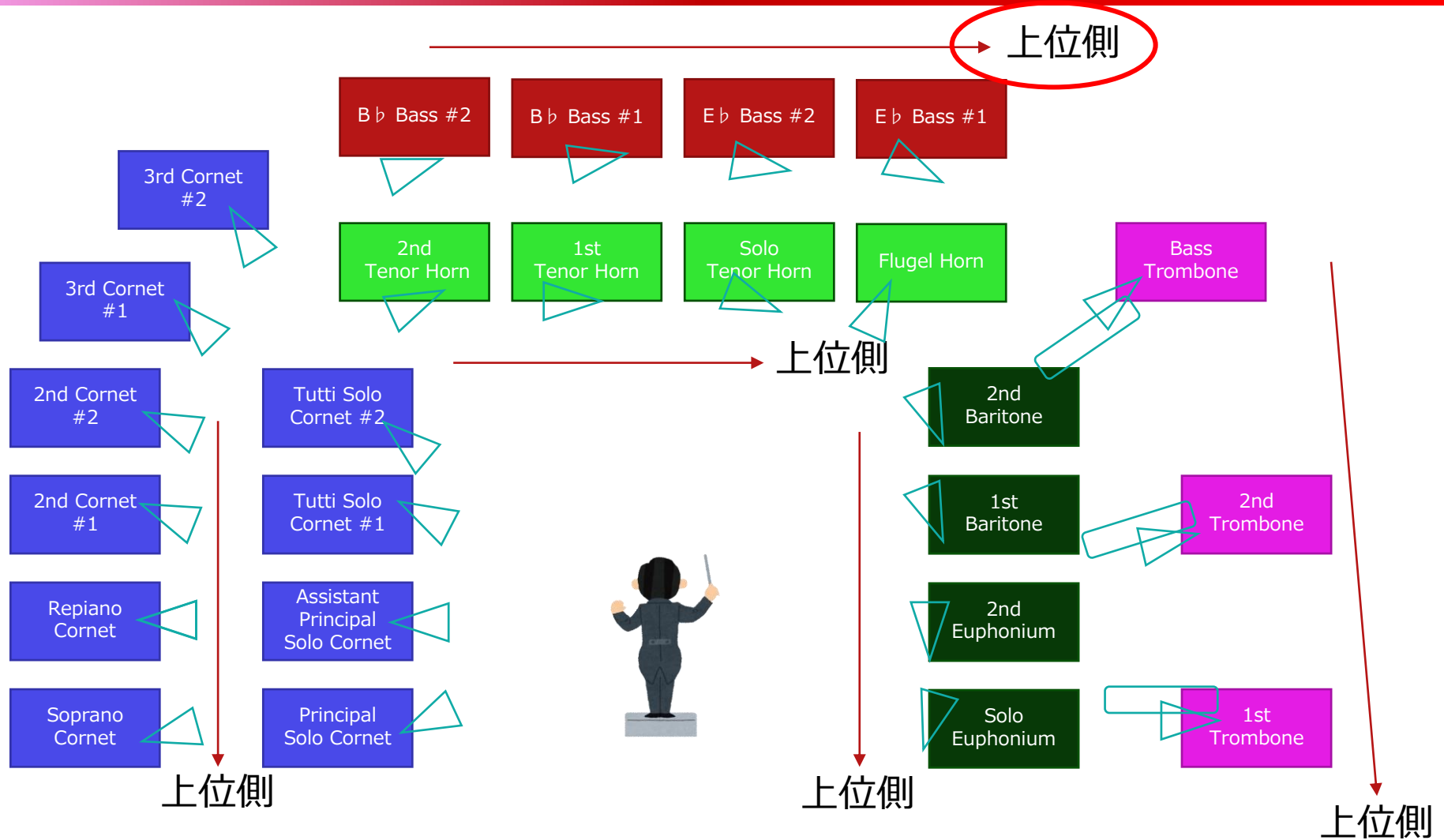
# オーソドックスな隊形(4)




※  この記号はベルの向きです。



# オーソドックスな隊形(5)

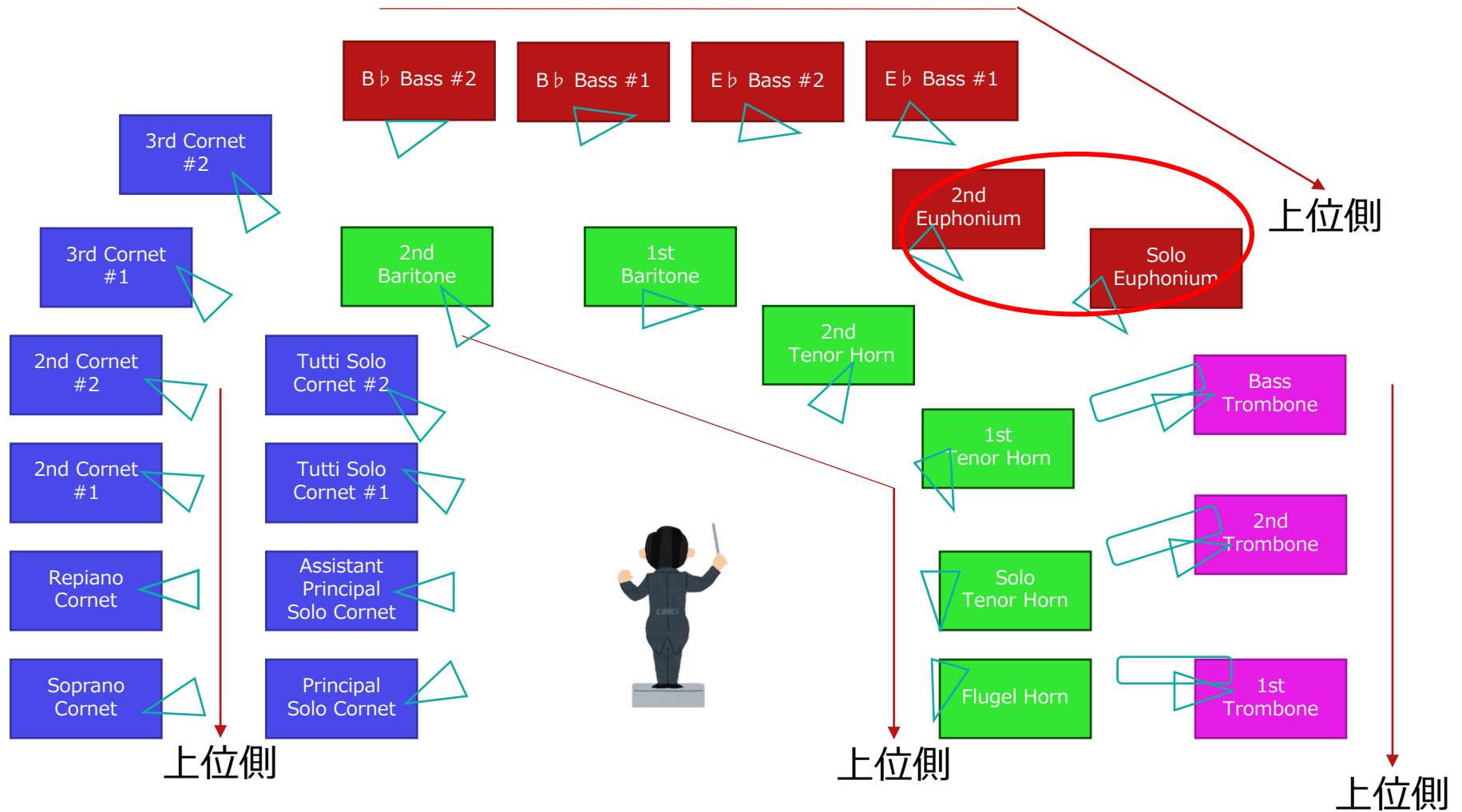


※ この隊形ではトロンボーンを除き上位側奏者がベルで見えないということがなくなります。


※  この記号はベルの向きです。



# グライムソープ・コリアリー・バンドが時々採る隊形



※ この隊形ではトロンボーンを除き上位側奏者がベルで見えないということがなくなります。

※  この記号はベルの向きです。

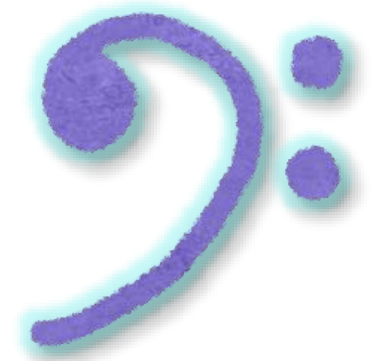




ブラスバンドでかっこよく吹きたい

# 「音」について考えよう

見落としがちなたり前の概念を確実に拾っていく





# そもそも音とは?

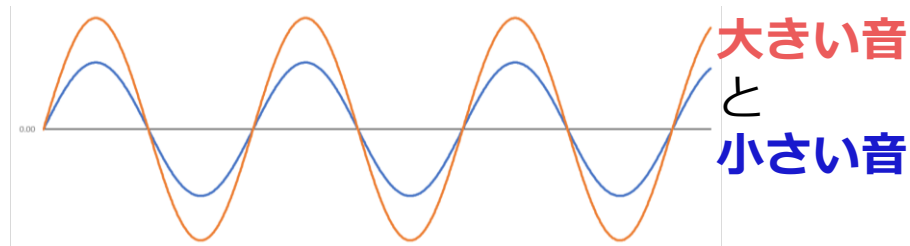


## 音

は、空気の振動(波)です。次の3つの要素から成り立っています。

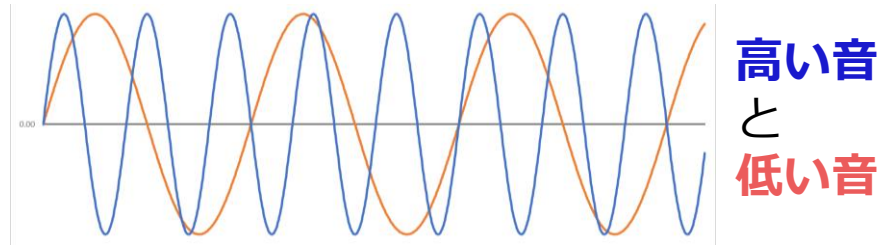
### 音量

は波の高さです。波が高いほど音は大きいです。



### 音高

は波の細かさです。波が細かい(周波数が高い)方が高いです。



低い音を基音として  
高い音は3倍音を例示しました。

### 音色

は?

※ 音波は実際には横波ではなく縦波(疎密波)であるため、横波を示す波線で表現することは厳密には正しくありませんが、わかりにくいので波線で書くことが多いです。疎密波→



## 音色

は、波の特徴です。

### 波の混じり方

がどうなっているか。

どんな細かさの波が、どういう大きさを、どれだけ混じっているか。

### 波の変化

がどのように進むのか

時間経過の中で、波の大きさや混じり方にどのような変化があるか。

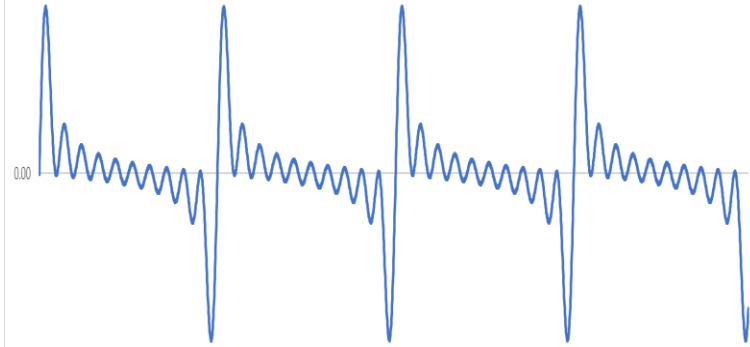


## 波の混じり方の例



(注) 難しいと思う人は波の形だけ憶えておいてください。

$$f(\theta) = \sum_{n=1}^{10} \sin n\theta$$



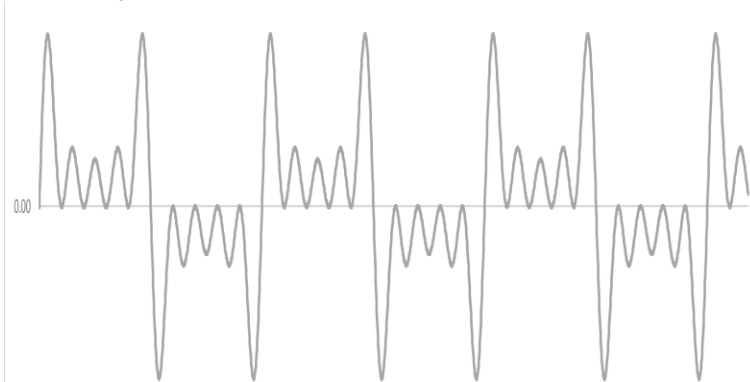
左は一番低い音(基音)の周波数の1倍から10倍まで整数倍の波を10波、同じ音量で合成したものです。

多くの管楽器、弦楽器の音は基音とその整数倍の周波数を持つ倍音が合成されています。

(物理的には「弦の固有振動」「**気柱の開管振動**」と言います。)

倍音の音量比率の違いで音色が変わります。

$$f(\theta) = \sum_{n=1}^5 \sin(2n-1)\theta$$



左は一番低い音(基音)の周波数の1倍から9倍まで奇数倍の波を5波、同じ音量で合成したものです。

一部の管楽器(クラリネットの低音域など)では偶数倍の音が合成されずに左のようになります。

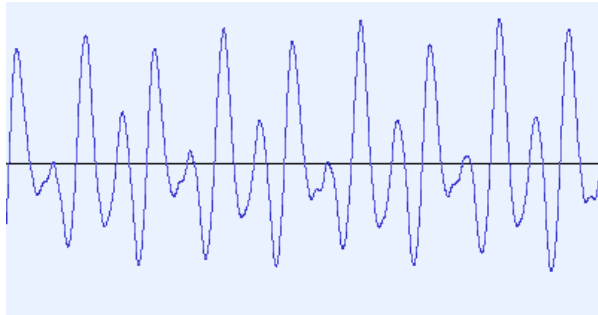
(物理的には「**気柱の閉管振動**」と言います。)



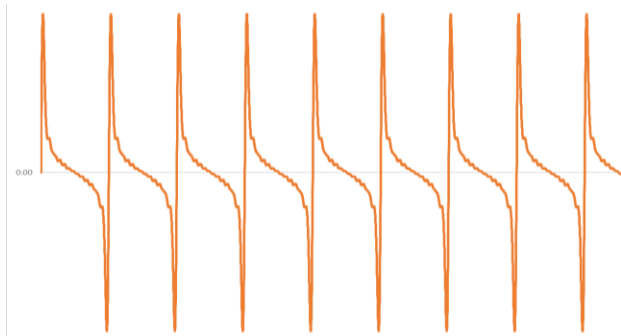
## 自分の音进行分析してみよう！(1)



「FFTwave」などのスマートフォンアプリや、「Audacity」などのサウンドエディタを使用すると波形が見れます。



左はとある有名奏者のソロCDから採取したユーフォニアムの波形の一部をAudacityで拡大表示したものです。縦が波の高さ、横が時間で、時間方向を拡大すると具体的な波形が見えてきます。美しい音色であれば、規則的な波形がしっかり観察できるはずです。



左はExcelで計算した第20倍音までの合成波形です。高い周波数ほど小さくなるように合成しています。金管楽器は左のような波形に近いほど理想的な音色に聞こえるはずです。

手本にしたい奏者の音と自身の音を比較することで違いを目で見ることができます。



## 自分の音を分析してみよう！(2)



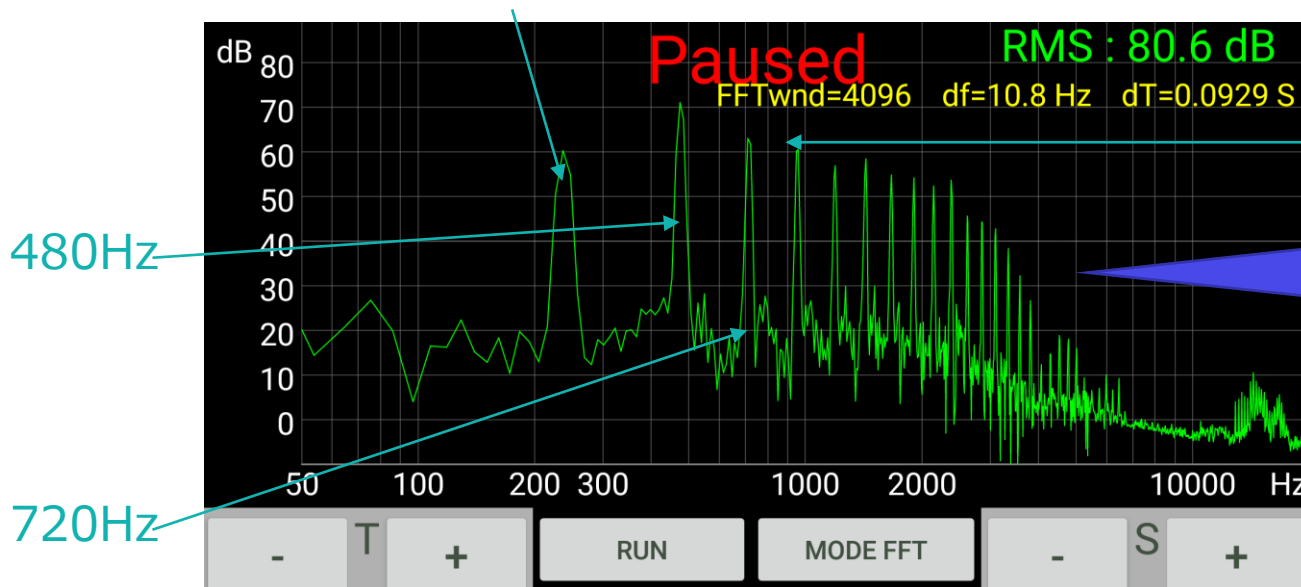
「FFTwave」などのスマートフォンアプリや、「Audacity」などのサウンドエディタを使用するとスペクトラム(同時に存在する周波数)が見れます。

高速フーリエ変換(FFT)機能やスペクトラム解析機能を使用するとどんな周波数がどれくらいの強さで含まれているかを見れます。

一般に数多くの倍音が含まれていると明るく豊かな音色に聞こえます。

下の図は240Hzの基音(だいたいB $\flat$ )と、その倍音の山が数多く見えてます。

240Hz



960Hz

等間隔で数多くの山が  
高く存在する方が  
よく響く艶やかな音  
色になります。

スマートフォンアプリ  
「Sound Oscilloscope」の  
FFTモードでの表示例



(参考) 「FFTWave」 や 「Audacity」 の入手先



iPhone/iPad

<https://itunes.apple.com/jp/app/fftwave/id1080227446?mt=8>



Android

[https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.gr.java\\_conf.ensoftware](https://play.google.com/store/apps/details?id=jp.gr.java_conf.ensoftware)



Windows, Mac OS X, GNU/Linux

<https://www.audacityteam.org/>

もちろんこれ以外の同種のソフトでもOKです。

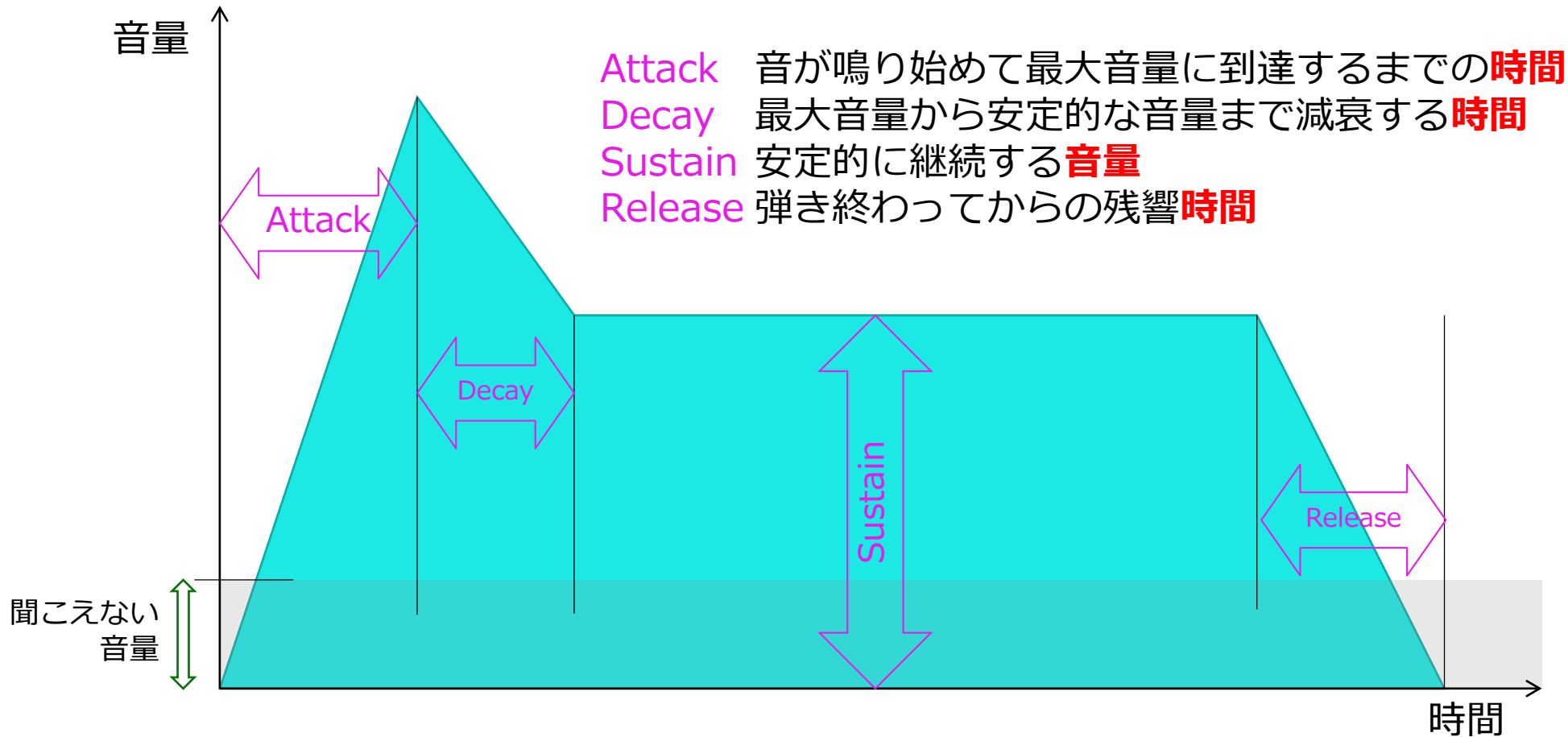


## 「波の変化」を知る(1)



楽器の音は時間の経過します。この音量の時間経過を「エンベロープ」(音楽用語と言うよりは電気回路用語)と言います。

典型的には下記の図のように変動するため、シンセサイザーなどでは必要な音色を作成するのに次の4つの基礎パラメータ(略称「ADSR」)があります。



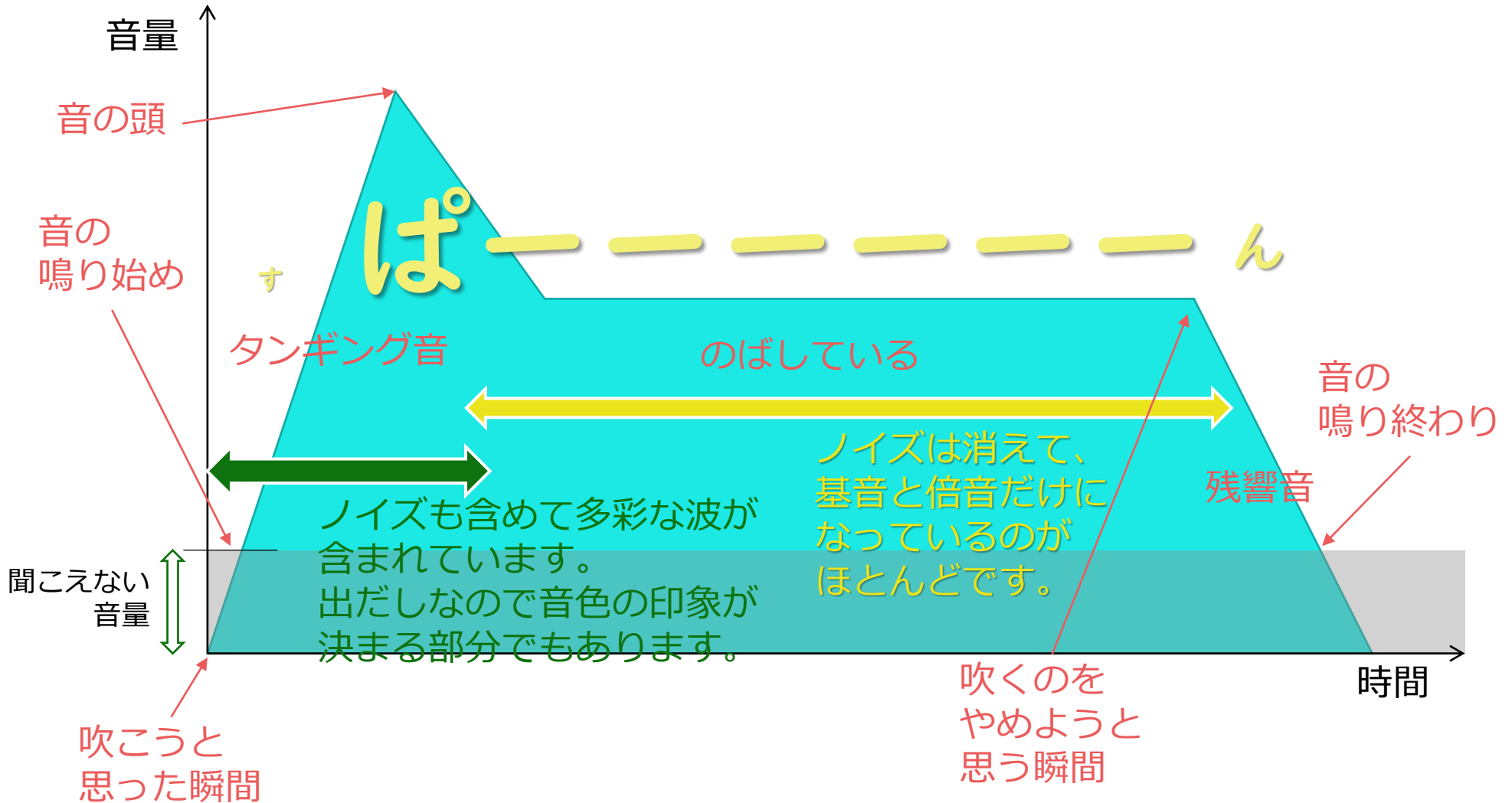




# 「波の変化」を知る(2)



金管楽器の演奏においてエンベロープはどういう状態になるのでしょうか。





## 「波の変化」を知る(3)



このエンベロープは楽器によっては固定的ですが、管楽器においては奏者の意思や技量によって変化します。

音楽のジャンルによって、好ましいとされるエンベロープは異なり、表情記号等との対応も変化します。

ジャンルごとの変化は「スタイル」や「様式」として捉えられていて、当然「ブリティッシュ・スタイル・ブラスバンドのスタイル」があります。詳細は後述します。

一般にエンベロープのADSRを変化させると下記のようになります。

Attackを短くする	はっきりした音、明瞭な音に聞こえる。
Attackを長くする	ぼんやりした音、不安な音に聞こえる。
Decayを短くする	パツと鋭い音に聞こえる。
Decayを長くする	ポーンと響くような音に聞こえる。
Sustainを大きくする	オルガンのような伸びる音になる。
Sustainを小さくする	ピアノのような減衰する音になる。
Releaseを長くする	大型打楽器のように残響が目立つようになる。
Releaseを短くする	響かない音に聞こえる。



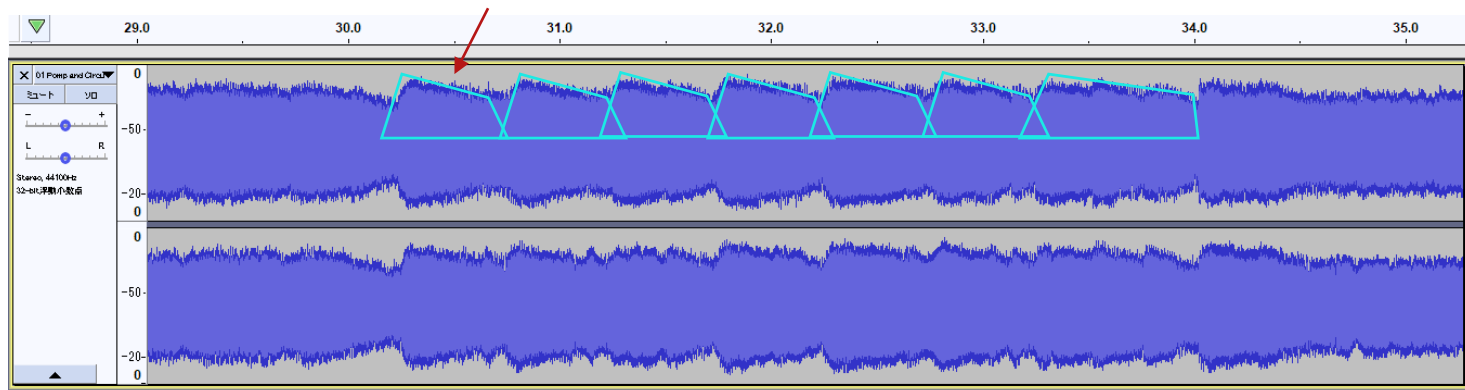
## 実演のエンベロープがどうなっているかの確認



オシロスコープやサウンドエディタで開き、横軸を十分に長い時間(秒単位)にするとエンベロープが姿を現します。

波の真ん中を基準に鏡あわせになっているので、上半分だけを見るとよいです。

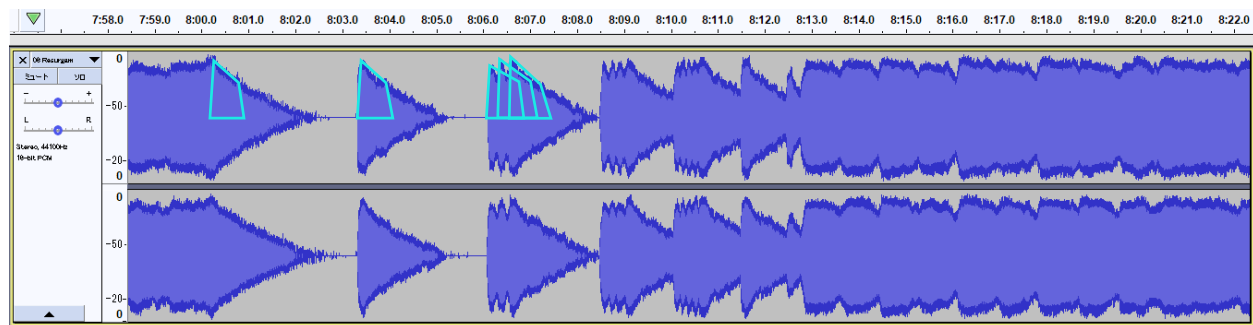
縦軸はデシベル(dB)になっている方が実際の聴感に近くエンベロープを確認しやすいです。



威風堂々  
第一番

## 交響詩「復活」 我ふたたび甦らん

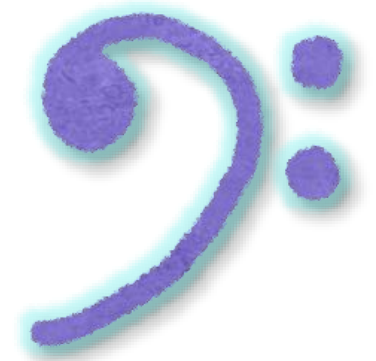
この録音はホール残響が多いので  
エンベロープと波形が少し差異があります。





ブラスバンドでかっこよく吹きたい

# 楽譜通りに吹くとはどういうことか ～日本の吹奏楽とのスタイルの比較～





音楽は旋律、和声、律動の3つの要素から成立しているとされています。



この章ではそれぞれを掘り下げながら「ブリティッシュ・スタイルのブラスバンド」のスタイルを探りたいと思います。

ここでの記載は「基本形」なので、音楽の場面場面で求められることにより多少変化したり、奏者の力量によって正確に吹き分けられていないことも多いです。

実際の演奏ではこれを参考にしつつ、指揮者の指示を優先しながら音楽を作りましょう。

なお、多くの奏者になじみがあるであろう日本の吹奏楽のスタイルも合わせて取り上げることで、同じ所と違うと心を理解できるようにしたいと思います。



基本となるエンベロープは下記の通りです。

アタックは短く、  
ディケイはゆるやかに長く、  
サスティーンは大きく、  
リリースは短くぶつ切り。

ブリティッシュスタイルのブラスバンドが客席に向けて吹いていないため、輪郭がぼやけます。そのため立ち上がりも切れもくっきり明確に吹きます。次の音との間にも意図的に無音部分を作ります。吹奏楽に比べ「音を止める」**タイミングに意識が必要**です。

無音時間の長さは空間残響に依存します。よく響く場所ほど隙間を空けます。

日本の吹奏楽の金管奏者には右のようなエンベロープが求められることが多いです。

これは木管楽器の音色がアタックが鈍くあまり大きな音量が響かないものが多いため、金管楽器の大音量にかき消されないようにするための工夫から生まれたスタイルではないかと考えます。

- アタックは普通。
- ディケイはゆるやかに長く、
- サスティーンはやや小さく
- リリースは長く残響を付けて。



## 旋律の演奏(基本エンベロープ(2))



基本となるエンベロープについて、ブラスバンドと、日本の吹奏楽の金管奏者に多いエンベロープを重ねてみました。差異から特徴を掴みましょう。

ブラスバンドの方が最大音量は小さいですが、減衰しないため、結果として面積は広いです。

### ブラスバンド (「ぱーーっ」)

ブラスバンドの方はくっきり音を区切ります。ベルが直接客席に向かないため、終わりをくっきりさせないと残響に埋もれてしまうからです。音に「区切り」を作ることによって音の輪郭を作ります。

吹奏楽の方が減衰音を好むようです。特にトランペットとトロンボーンはその傾向が強くなります。舞台後方からの大きな音で前方の木管の繊細な音色をかき消さないためと考えられます。

### 日本の吹奏楽 (「ぷああん」)

ブラスバンドの方が立ち上がりは速いです。きつい躊躇のないアタックが求められますが、壁によりきつさは中和されます。

吹奏楽の方が余韻のある音を好みます。特にトランペットとトロンボーンはベルが直接客席に向いているため、終わりをくっきりさせると目立つため、そう癖づけています。曖昧に音を終わることでバランスがとられます。



アクセントのついたエンベロープは下記の通りです。(律動の章も参照のこと。)



アタックは短く、  
ディケイはゆるやかに長く、  
サスティーンはやや小さく、  
リリースは短くぶつ切り。

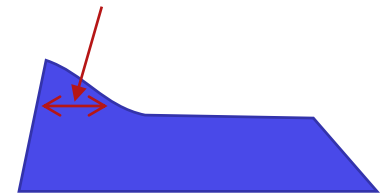
基本的に記号の形(>)を  
エンベロープで再現する  
イメージです。



アタックは短く、  
ディケイはゆるやかに長く、  
サスティーンはとても小さく、  
リリースは短くぶつ切り。

こちらも記号の形(^)を  
エンベロープで再現する  
イメージです。

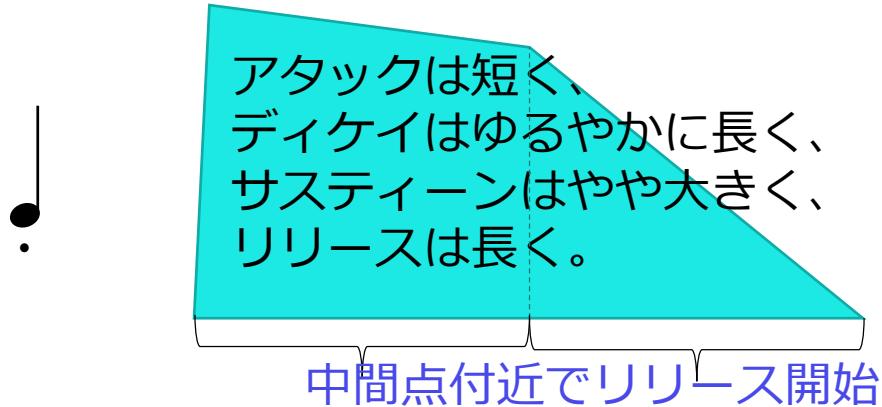
日本の吹奏楽ではアクセントはディケイ時間の短さの程度で  
表現している人が多いようです。  
速く減衰することで音の形がはっきりするように聞こえるからです。



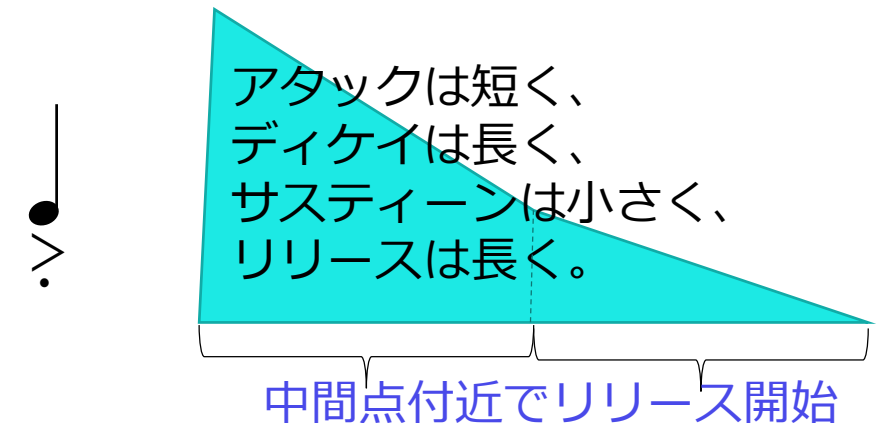




スタッカートのついたエンベロープは下記の通りです。

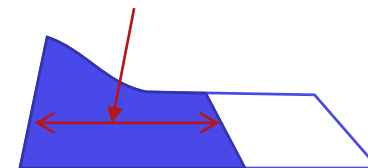


アクセントがサスティーンレベルで表現しているのに対し、スタッカートはリリースタイムの長さで表情を作ります。リリースを長くするには吹き終わりで息を止めずに抜いていくように残響・余韻を作ります。



アクセントスタッカートはその組み合わせなのでサスティーンレベルは低く、リリースは長くなります。

日本の吹奏楽ではアクセントは音符の長さを半分になるように区切るように表現している人、指導する人が多いようです。





## 旋律の演奏(上行と下行)



人間は音が高くなっていく旋律を聴くとテンションが上がり、音が低くなっていく旋律を聴くとテンションが下がる傾向があります。

そのため、上行旋律ではテンションを貯めながら、下行旋律ではテンションを放出しながら、といった演奏をすると自然に聞こえます。

これはクラシック系のほかの形態と大した違いはなく共通のようです。



## 旋律の演奏(crescendoとdecrescendo)

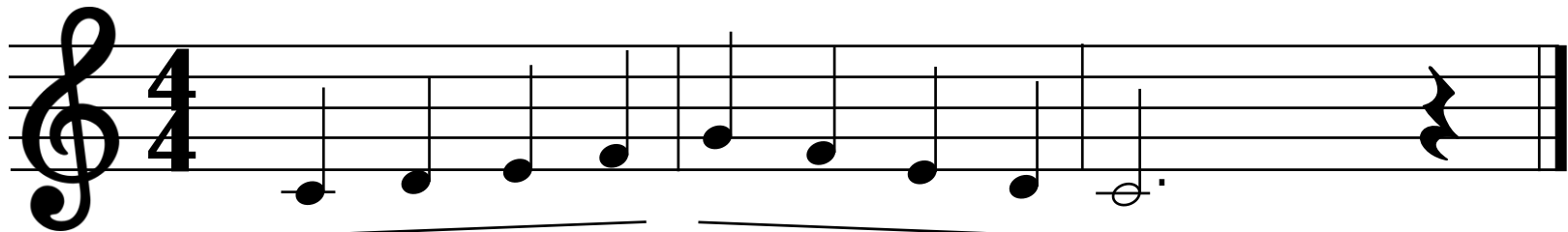


段階的に音量を変化させるcrescendo、decrescendoですが、全員で意識をそろえて同じように変化するために、複数拍にかかるものは拍ごとに変化させるというお約束があります。一つの音の中でエンベロープを変化させることは間違いです。

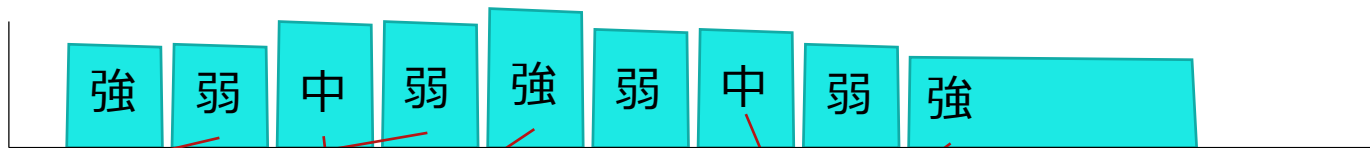
しかし拍ごとに単純階段状にはなりません。拍ごとの位置づけを踏まえた形でcrescendo、decrescendoをします。

crescendo、decrescendoは「<」「>」と松葉記号で表記するときもありますが、両方使用されている場合、作曲者によっては拡大、成長など近い意味で意図を持って使い分けているので、何を変化させたいのか意図にはよく注意してください。

decrescendoとdiminuendoも似た意味ですが、縮小と減退のようなニュアンスの違いがあります。



音量



弱拍は直前の拍と同じ大きさにする

直前の強拍、中強拍の音量は超えていく

直前の弱拍の音量は超えない

※ 拍の強弱は律動のページを参照のこと。



## 旋律の演奏(accelerandoとritardando等)

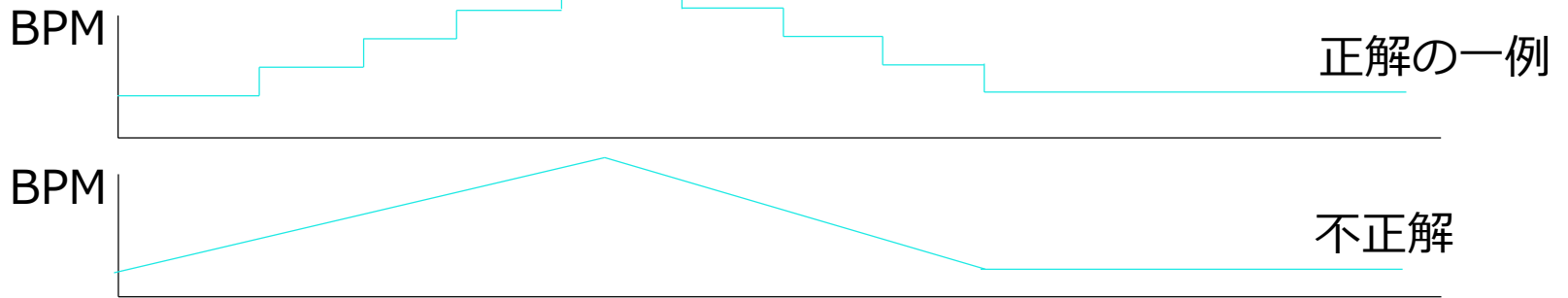
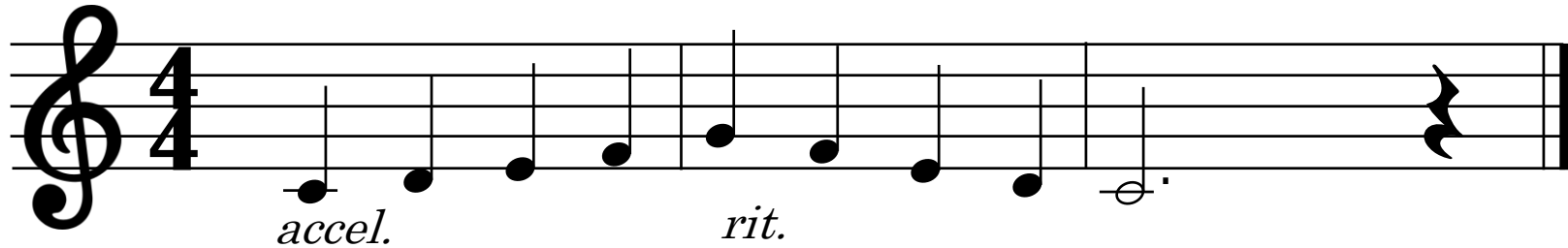


段階的にテンポを変化させるaccelerando、ritardando等ですが、全員で意識をそろえて同じように変化するために、複数拍にかかるものは基本の拍ごとに変化させるというお約束があります。

時間経過とともにも拍と無関係に変化させることは間違いです。

なお変化の程度やかかり具合については、スコアを元に作曲者の意図を勘案して演奏効果を最大化すべく指揮者が決定する専権事項です。奏者が自己都合で決定してはいけません。指揮者に従ってください。

ritardandoのほかにrallentandoがありますが、リタルダンドはなんとなくテンポが落ちていく、ラレンタンドの方がより意識的にテンポを落とすニュアンスがあります。



※ BPM : Beat Per Minuteの略、一分間に刻む拍の数のこと。



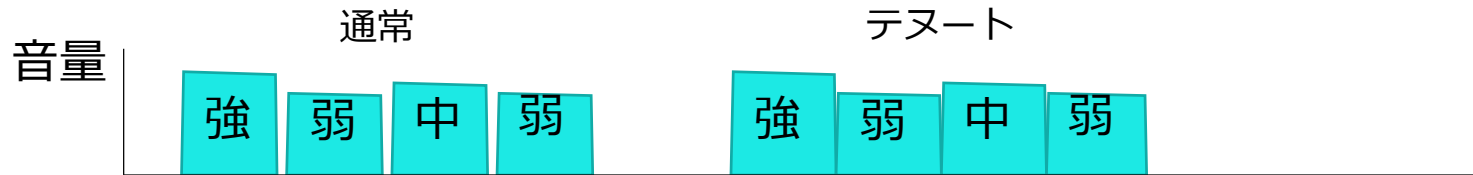
## 旋律の演奏(テヌートのエンベロープ)



テヌート (-) のエンベロープを定義したいところですが、ブリティッシュスタイルのブラスバンドの演奏を聴いている限りでは記号は同じでも2種類あるようです。

どちらを採用するのは曲のニュアンスでわかることも多いですが、指揮者やソロ奏者に依存します。

- 次の音との間の切れ目を目立たなくするテヌート  
音の後ろに作っている隙間をなくします。



- ビートが消えないフェルマータとでもいうかのようなテヌート  
そこだけテンポがガクッと落ちて強調する演奏が、ソロ曲を中心に見られます。  
これはエンベロープの問題ではないと思います。

※ 日本の吹奏楽では前者が圧倒的に多いです。

※ 丁寧に吹いて欲しい「歌いどころ」がテヌート記号で示されている曲もあります。



## 旋律の演奏(スラー)



スラーは複数の音符をひとまとまりの旋律として指示する記号です。  
結果としてひとまとまりに聞こえていればよいです。

日本の吹奏楽では、よく「スラーの間は息継ぎしてはいけない」「タンギングしてはいけない」と指導されます。守ると確かにスラーに聞こえますが、次の理由から吹奏楽ほど厳密に守る必要はブリティッシュスタイルのブラスバンドにはありません。

- ブリティッシュスタイルのブラスバンドには「息継ぎは交代でやる」という暗黙のルールがある。  
各セクションの最上位奏者(フォーメーションのページ参照)は音楽的に正しい位置を意識する必要がありますが、同時に吹いている奏者が下位にいれば旋律は途切れないので、息継ぎが可能です。  
無理してワンフレーズを吹こうとするよりは、気持ちとしては自然なワンフレーズになるようにし、必要なブレスを採りましょう。
- ブリティッシュスタイルのブラスバンドは基本的に直接ベルの音が客席に届かないからタンギングの破裂音がスラー感の邪魔にならない。



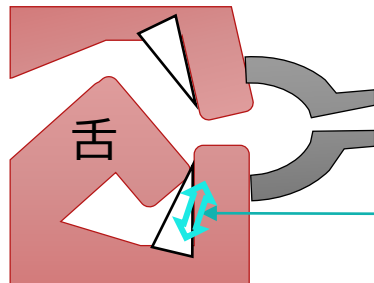
## 旋律の演奏(ビブラート) (1)



ブリティッシュスタイルのブラスバンド最大の特徴のようにいわれるビブラートですが、時代に関係なくブリティッシュスタイルのブラスバンドでは下記は守られています。

- 音程はほとんど変化させず音色または音量を変化させます。  
よく聴くとビブラートは二種類あって同時にかけていることもあります。
- ソプラノコルネットからB♭ベースまで全ての楽器で、指示がなければ全ての音にさざ波のような細かいビブラートをかけています。理由は後述。(ビブラートその1)
- ソロの局面などでは他のジャンルと同様の演奏表現としてはっきりと波のわかるオペラ歌手のようなビブラートをかけている。(ビブラートその2)

ビブラートその1と書いた方は下図のように顎の動きを使ってかけている(※)ものと思われ、ビブラートその2は腹筋等の動きで息の量を変化させているものと思われます。



下唇をクッションにしてマウスピース下側と下の歯の位置関係を少しずらすと音色だけ変化する。一定幅を超えると音程が変わってしまうので、その幅の範囲内で振動する。振動幅は楽器によって違う。  
振動開始位置は奏者ごとにばらついた方がよい。

※ コルネットに関してはピストンをぐりぐり押し込むことで楽器を揺らしてかけている人もいます。



## 旋律の演奏(ビブラート) (2)



さざ波のようなビブラートは曲によって差はありますが、一拍あたり3~5つの波を入れるのが標準的とされています。たぶん4つ入れている人が多いです。

時代によって程度は変化しつつあり、1970年代がピークで次第に目立たなくなりつつありますが、昔の曲を演奏する際にはこのビブラートスタイルを意識して演奏しないとしくりきません。

イギリスの炭鉱夫を中心に楽しまれていたことから、指示の理解度や同時処理能力に大きな個人差のあるなかで、いかに音楽をそろえていくかということに腐心した結果生まれたスタイルなのではないかと考えています。結果として下記のような効果があります。

- 音程をきっちりそろえられなくてもだいたいあっていれば目立たないようになる。
- さざ波のようなビブラートを入れさせることで、適切な細かいビート感を体内に生み出し、16分音符などの細かい音符のタイミングをとれるように仕向けている。
- ビブラートを入れているとバリバリという「馬鹿吹き」が難しくなり、音色が安定する。
- 壁を反射した音が客席に届く際にまろやかで耳障りがよくなる。

信じられないぐらいにやりやすくなります。

ビブラートかけながらやれる人がいたらすごいです。

etc…



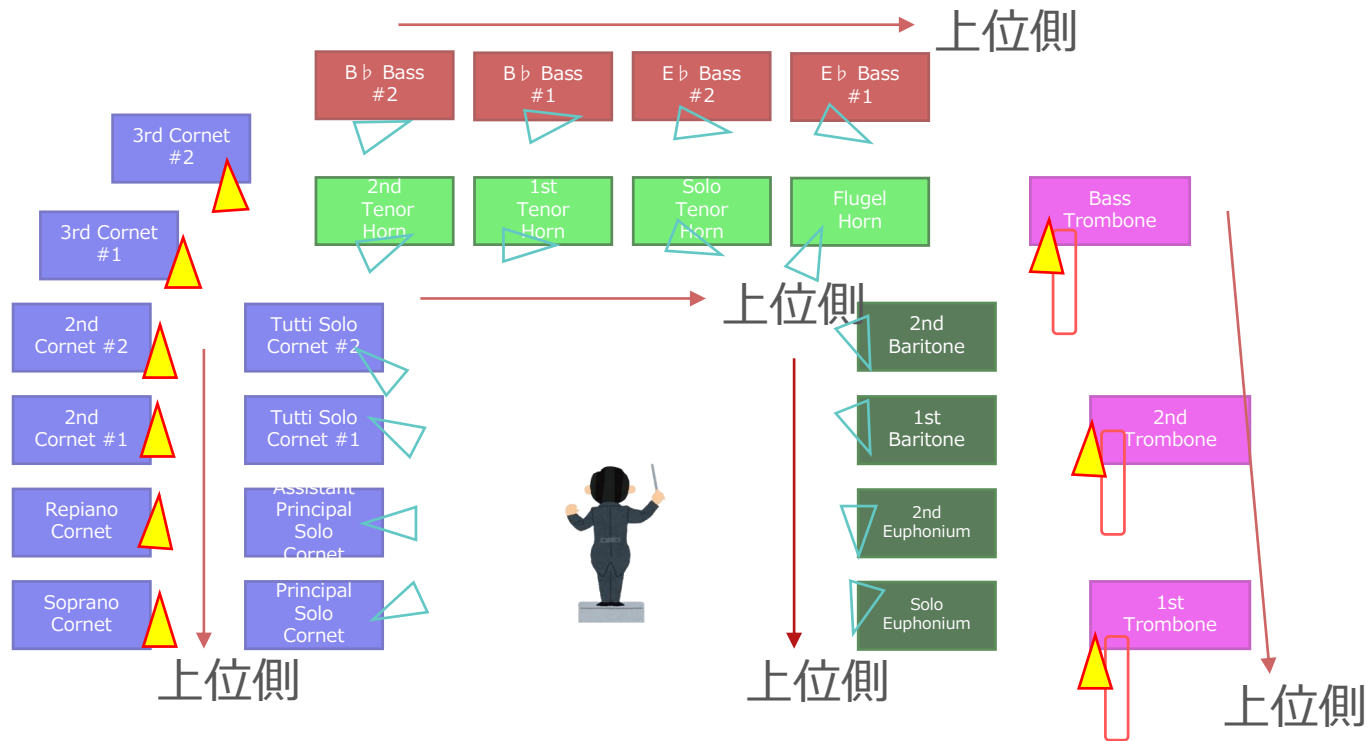


# 旋律の演奏(ビブラート) (3)



後列コルネットとトロンボーンについては、曲調によっては全力で大きな音を吹くことが要求されることもあります。

その場合はビブラートのない硬い音色で鳴らし「ラッパ感」を強調します。  
より強調する場合は、その瞬間だけセクション全体で客席を向く指示が出ることがあります。





## 和声(1) 美しくハモる音程のとり方



和声ではブラスバンドに特別にスタイルがあるわけではありません。

基本的に旋律やベースラインの音程は平均律でとります。

和音を構成するパートはベースの音程をもとに、その瞬間を切り取ったときに美しく響く周波数の関係になるように音程をとります。

人が聴いて美しいと感じる和音を構成する周波数の関係は、周波数の比がわかりやすい整数で構成されるときです。(吹奏楽指導ではこれを「純正律」と雑に呼ぶ人が多いです。)

上手く響かないときは、美しく響くように、各楽器の演奏する音から正しいコードを把握し、自分が高め取るべきか低め取るべきかを確認しましょう。

コード「B♭」	平均律の音程	美しく響く音程	美しく響くチューナーの表示	
第五音 (F)	359Hz (≒240×2 <sup>(700/1200)</sup> )	360Hz (= 60×6)	360Hz (≒240×2 <sup>(702/1200)</sup> )	2セント高め
第三音 (D)	302Hz (≒240×2 <sup>(400/1200)</sup> )	300Hz (= 60×5)	300Hz (≒240×2 <sup>(386/1200)</sup> )	14セント低め
根音 (B♭)	240Hz (≒240×2 <sup>(0/1200)</sup> )	240Hz (= 60×4)	240Hz (≒240×2 <sup>(0/1200)</sup> )	0セント (根音は平均律通り)
コード「B♭m」	平均律の場合	ほぼ美しく響く音程	ほぼ美しく響くチューナーの表示	
第五音 (F)	359Hz (≒240×2 <sup>(700/1200)</sup> )	360Hz (= 24×15)	360Hz (≒240×2 <sup>(702/1200)</sup> )	2セント高め
第三音 (D♭)	285Hz (≒240×2 <sup>(300/1200)</sup> )	288Hz (= 24×12)	288Hz (≒240×2 <sup>(316/1200)</sup> )	16セント高め
根音 (B♭)	240Hz (≒240×2 <sup>(0/1200)</sup> )	240Hz (= 24×10)	240Hz (≒240×2 <sup>(0/1200)</sup> )	0セント (根音は平均律通り)

※ 1セント高い音とは、「2の『1200分の1』乗」倍高い周波数の音のこと。

※ 音程の調律方法はいろいろあるので「音律」を調べると沼には入れます。All Rights Reserved 2018-2019 MORISUE Yoshihiko



## 和声(2) 美しくハモる音程のとり方



転回形も参考に載せておきます。

コード「B♭」	平均律の音程	美しく響く音程	美しく響くチューナーの表示	
根音 (B♭)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	480Hz (= 60×8)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	0セント (根音は平均律通り)
第五音 (F)	359Hz (≒ $240 \times 2^{(700/1200)}$ )	360Hz (= 60×6)	360Hz (≒ $240 \times 2^{(702/1200)}$ )	2セント高め
第三音 (D)	302Hz (≒ $240 \times 2^{(400/1200)}$ )	300Hz (= 60×5)	300Hz (≒ $240 \times 2^{(386/1200)}$ )	14セント低め

コード「B♭」	平均律の音程	美しく響く音程	美しく響くチューナーの表示	
第三音 (D)	604Hz (≒ $240 \times 2^{(1600/1200)}$ )	600Hz (= 60×10)	600Hz (≒ $240 \times 2^{(1586/1200)}$ )	14セント低め
根音 (B♭)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	480Hz (= 60×8)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	0セント (根音は平均律通り)
第五音 (F)	359Hz (≒ $240 \times 2^{(700/1200)}$ )	360Hz (= 60×6)	360Hz (≒ $240 \times 2^{(702/1200)}$ )	2セント高め

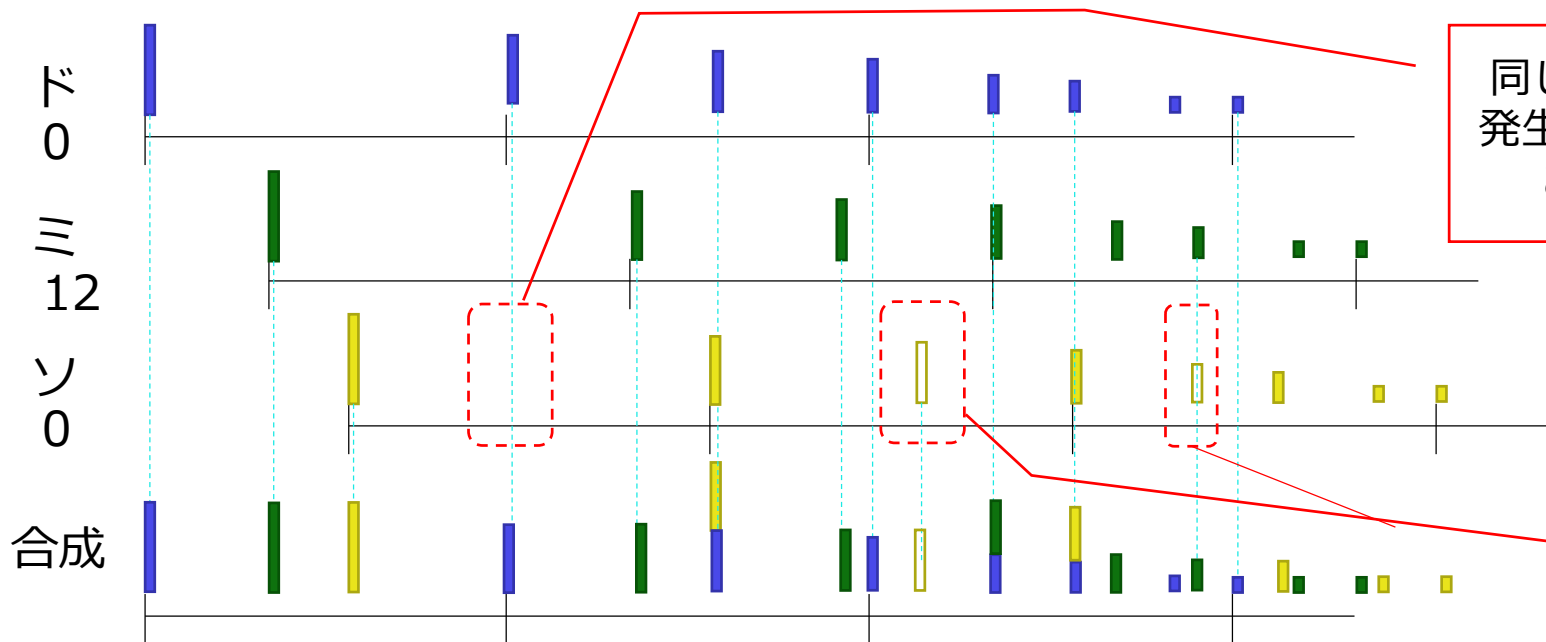
コード「B♭m」	平均律の場合	ほぼ美しく響く音程	ほぼ美しく響くチューナーの表示	
根音 (B♭)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	480Hz (= 24×20)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	0セント (根音は平均律通り)
第五音 (F)	359Hz (≒ $240 \times 2^{(700/1200)}$ )	360Hz (= 24×15)	360Hz (≒ $240 \times 2^{(702/1200)}$ )	2セント高め
第三音 (D♭)	285Hz (≒ $240 \times 2^{(300/1200)}$ )	288Hz (= 24×12)	288Hz (≒ $240 \times 2^{(316/1200)}$ )	16セント高め

コード「B♭m」	平均律の場合	ほぼ美しく響く音程	ほぼ美しく響くチューナーの表示	
第三音 (D♭)	571Hz (≒ $240 \times 2^{(1500/1200)}$ )	576Hz (= 24×24)	576Hz (≒ $240 \times 2^{(1516/1200)}$ )	16セント高め
根音 (B♭)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	480Hz (= 24×20)	480Hz (≒ $240 \times 2^{(1200/1200)}$ )	0セント (根音は平均律通り)
第五音 (F)	359Hz (≒ $240 \times 2^{(700/1200)}$ )	360Hz (= 24×15)	360Hz (≒ $240 \times 2^{(702/1200)}$ )	2セント高め

※ 1セント高い音とは、「2の『1200分の1』乗」倍高い周波数の音のこと。



# 和声(3) 倍音も八モらせる



同じ運指(0)でも発生しない倍音があります。

B♭管では共鳴できないため、倍音が発生しません。

ド ミ ソ ド ミ ソ シドレ ミ ソ シド



きれいに八モるとベース(ド)の1オクターブ半上のソや2オクターブと少し上のミ、ソに該当する音は響きやすくなります。



## 和声(4) 倍音もハモらせる 補足



倍音まで含めて考えたときに、ブラスバンドで使用される楽器がなぜB♭管とE♭管だけで構成されているのか、その一面が見えてきます。

- ブラスバンドにはB♭ベースとE♭ベースを5度でハモらせる譜面が多くあるのは、中高音域のサウンドを豊かにするためなのです。(ソの段の白抜きの倍音が響くようになります。)
- ブラスバンドの楽器がフレンチホルンではなくテナーホーンを、C管やF管のチューバではなくB♭管やE♭管のバスを使用するのかといえば、倍音まで含めてよく響くように編成されているためなのです。調性がB♭ & E♭系列でそろえることにより倍音も衝突せずに響きます。ほかの管の調性が混じると衝突する音が出るため、きれいにハモらせるのがすこしだけ難しくなり、混ざりにくくなります。
- 吹奏楽でハーモニーの練習を異様なまでに徹底的にやるのはB♭、E♭、C、Fの各調の楽器が混在して倍音をきれいに響かせるのが難しいからなのかもしれません。
- オーケストラではハーモニーは弦で生み出しているため「○管」というくりがナンセンスであるものの、管楽器はC&F系列の管が好まれることが多い印象です。トランペットはC管、チューバはF管、ホルンもF管。サクソがないのはE♭管だから、ユーフォニアムがないのはB♭管だから。B♭管だけれどトロンボーンは完璧な音程を作れ、クラリネットは閉管振動のために倍音もF系列がよく響くため違和感が少ないから存在できるのかもしれません。



## 和音(5) ピストンの仕組みと音程(1)



ピストンは3本または4本がついており、押すことにより管が長くなり音程が下がります。

ピストン	下がる音程の幅	伸びる管の長さの比率
1番	2半音(200セント)	12%
2番	1半音(100セント)	6%
3番	3半音(300セント)	19%
4番	5半音(500セント)	34%

3番ピストンの管をわざと長めにして  
組み合わせ時の音程改善を狙った  
モデルもあります。

しかし、音程はかけ算の世界であるため、ピストンを組み合わせた足し算とはずれが生じ、組み合わせれば組み合わせるほど高めの音が出ます。  
トリガーやリングにより管を伸ばせるようにした楽器が多いのはこの誤差を吸収するためです。

押すピストン	下がる音程の幅	伸びる管の長さの比率	理想値	差分
1番、2番	3半音(300セント)	$12\%+6\% = 18\%$	19%	1%
2番、3番	4半音(400セント)	$6\%+19\% = 25\%$	26%	1%
1番、3番	5半音(500セント)	$12\%+19\% = 31\%$	34%	3%
1番、2番、3番	6半音(600セント)	$12\%+6\%+19\% = 37\%$	41%	4%
2番、4番	6半音(600セント)	$6\%+34\% = 40\%$	41%	1%
(中略)				
1番、2番、3番、4番	11半音(1100セント)	$12\%+6\%+19\%+34\% = 71\%$	89%	18% (約150セント)



## 和音(5) ピストンの仕組みと音程(2)



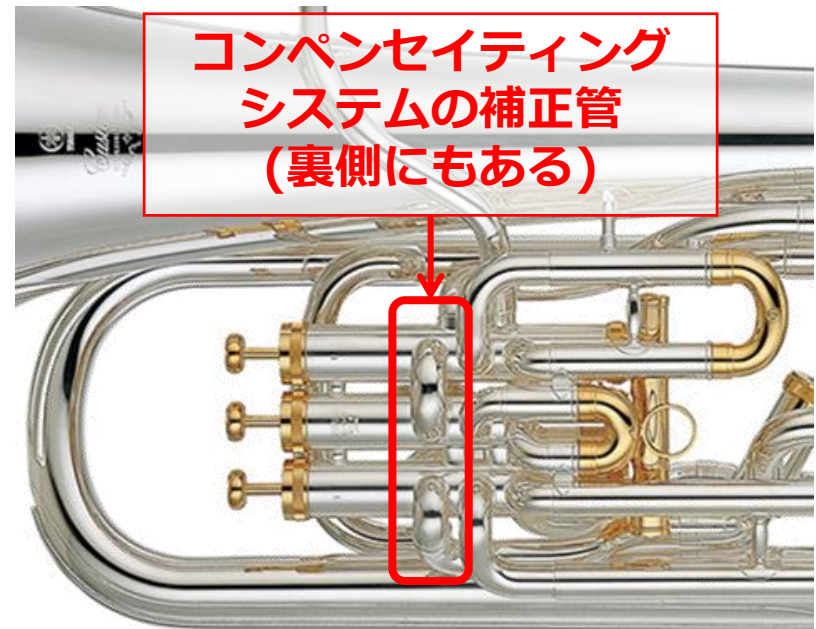
ピストンは4本がついた楽器の場合、多くのピストンを組み合わせて押したときの音程と管長の差分が非常に大きくなり、トリガーでは補正しきれません。

そのため、4番ピストンと別のピストンを同時使用したときだけ余分に迂回するように工夫して音程を補正する「コンペンセーティングシステム」が搭載されているものがあります。

搭載が多いのはバリトン(3番ピストン)、ユーフォニアム(4番ピストン)、バス(4番ピストン)ですが、バリトンは4番ピストンがなかったり組み合わせるような演奏が要求されないこと、バスは管を補正しても人体側が技量的に適合できないことが多くあまり効果を発揮しません。

音域が広く低音域でも機動性を要求されるユーフォニアムについては、運指の容易性も改善されるため、ブラスバンドでは必須と言えるほどに普及しています。

コンペンセーティングシステムは音程は改善しますが抵抗感が増えて吹きにくくなりますので、安定した演奏ができるようになるには十分な低音域の訓練が必要です。



YAMAHA YEP-842Sのピストン部分





## 和音(6) 合っているという感覚を掴む練習方法(1)



「音程をあわせてハモらせましょう。」と言われてもよくわからないよという人も多いと思います。

下記で試してみるのはいかがでしょうか。

### ■ボイストレーニング用チューナーアプリを使用

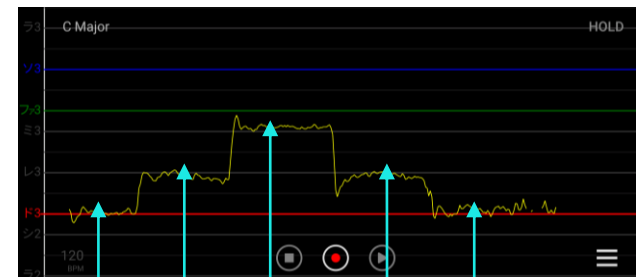
ボイストレーニング用チューナーアプリを使用しながら、音感を確認します。

このアプリの場合、縦軸が音の高さ、横軸が時刻というグラフ上に演奏した音の音程が黄色い線で描かれます。

自分の声で歌いながら狙った音程を出せるように練習します。まずは「ド」が正しく出せるように練習し、その後、音階をうたってみましょう。

右の画面は「ドレミレド」と歌ってみた結果のサンプルです。

声で歌えるようになると楽器の音程も合わせて改善します。音程感覚が身につくから、上がりすぎたり下がりすぎたりしなくなるからと思われる。



ド レ ミ レ ド

アプリ「ボイカル音程モニター」の画面





## 和音(6) 合っているという感覚を掴む練習方法(2)



### ■カラオケの採点機能を使う

カラオケ屋さんで、好きな曲（ゆっくりな曲推奨）を歌い、採点してスコアを確認しましょう。

カラオケの「分析採点」(joysound)や「精密採点」(DAM)などの採点機能を使いながら、画面のバーを正しくなぞりながら歌い、「伴奏と自分の声が『あってる』感」を身につけてみてください。

音程が合っていたらどちらのカラオケ機器でも85点から90点ぐらいは出ます。

合っているときは独特の感覚がありますのでそれをつかめると楽器でも同じ感覚を目指せばよいので早いです。



ジョイサウンド「分析採点III」の画面



## 律動(1) 拍子の表記と読み方



律動(Rhythm リズム)とは、一定の規則性に従って発生する音のことです。  
小学校でも習うことなのですが、正しく理解できている人は案外少ない気がします。

例えば「4分の4拍子」は「四分音符の四拍子」なので「しぶの よんびょうし」であり、「よんぶんのよん びょうし」ではありません。算数とは結びつけてはいけません。  
この部分から認識を確認しないと、拍子が取れずリズムがわからないという事態になります。

1 小節に含まれる拍数

違う拍子です。

拍子の単位となる音符の指定

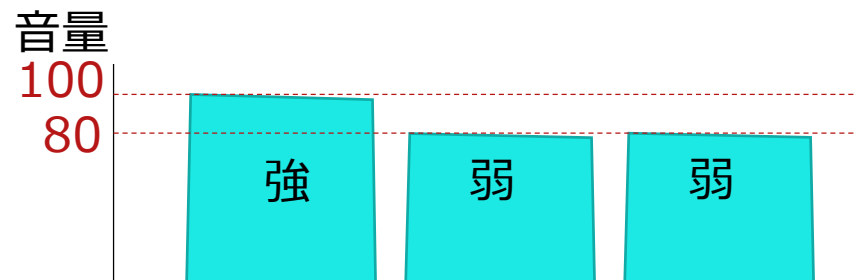
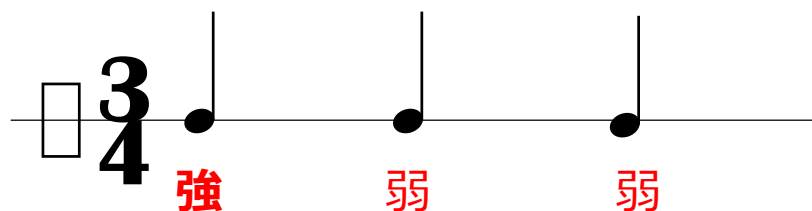
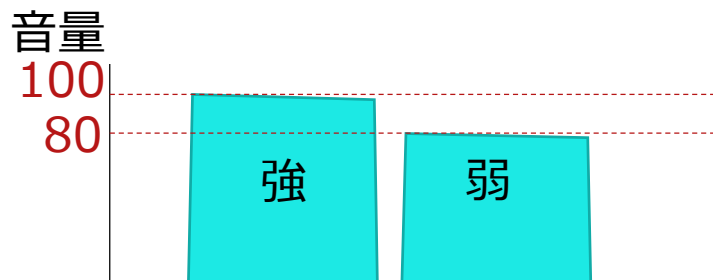
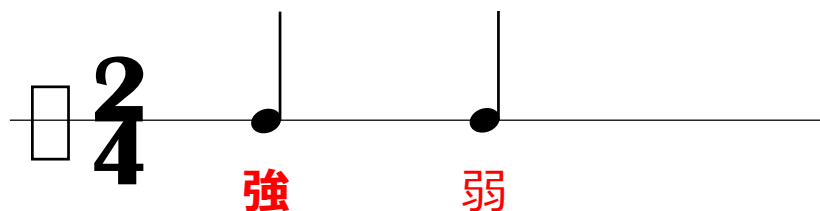


## 律動(2) 拍子の構造(1)



拍子は「二拍子」と「三拍子」が基本です。

拍子は「強拍」と「弱拍」から構成され、音量に差がつきます。弱拍にある音は強拍の音量を超えてはいけません。



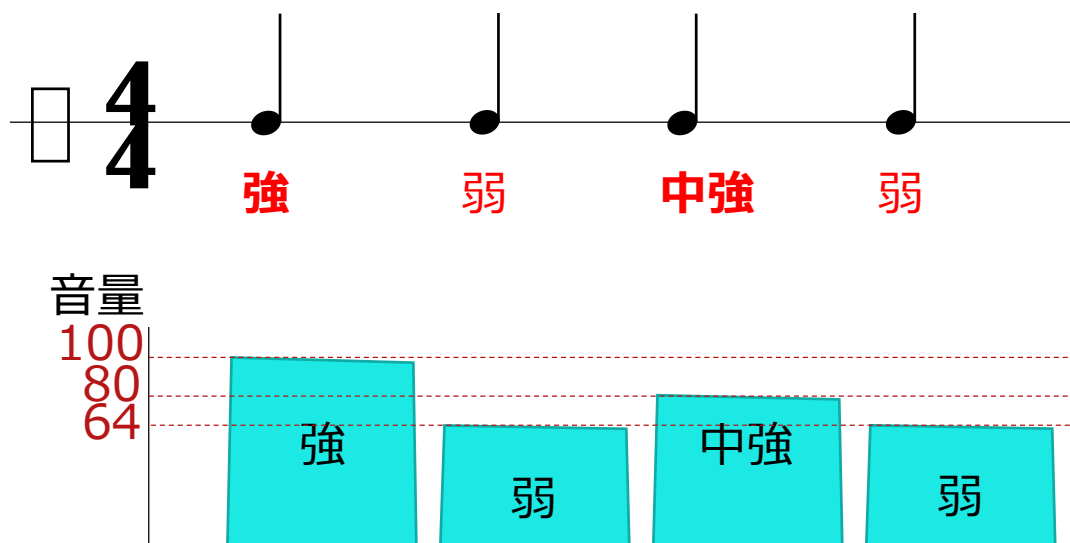
強と弱のバランスは曲調やジャンルによって変動しますが、マーチなどの拍が明確に出ることが好まれる曲調では強に対して弱の音量は8割以下に抑え、明確に差がつくようにします。



## 律動(2) 拍子の構造(2)



よく用いられる拍子は「四拍子」ですが、これは二拍子が組み合わさったものです。あまりにも多く用いられ、親しみやすいため、基本の拍子には四拍子も含めて「単純拍子」と呼ばれます。



二拍子の1拍目をさらに二拍子で分割、2拍目も二拍子で分割したものになるため、「強+弱」の組み合わせが2回繰り返し、二回目の強は1回目の強よりも弱くなります。それぞれの弱は一番弱くないといけなないので、「弱い方の強」(中強)に対して8割未満になるようにバランスをとります。



# 律動(3) 複合拍子



単純拍子である二拍子、三拍子、四拍子の各拍を3つに分割したものを複合拍子と言います。二拍子から四拍子を作ったときと同様に各拍を三分割します。

二拍子 ↓	 <b>2/4</b> 強 弱	三拍子 ↓	 <b>3/4</b> 強 弱 弱
	 <b>6/8</b> 強 弱 弱 中 弱 弱		 <b>9/8</b> 強 弱 弱 中 弱 弱 中 弱 弱
四拍子 ↓		 <b>4/4</b> 強 弱 中 弱	 <b>12/8</b> 強 弱 弱 弱 弱 弱 中 弱 弱 弱 弱 弱



# 律動(4) 変拍子



複合拍子では、全ての拍が均等に三分割されていますが、分割の単位が拍ごとに異なるものもあります。変拍子と呼ばれます。(混合拍子と呼ばれるものもあります。)

**二拍子**

**2/4** 強 弱

**5/8** 強 弱 弱 中 弱

**三拍子**

**3/4** 強 弱 弱

**7/8** 強 弱 弱 中 弱 中 弱

**四拍子**

**4/4** 強 弱 中 弱

**10/8** 強 弱 弱 弱 弱 弱 中 弱 弱 弱



# 律動(5) 変拍子(ポリリズム)



ブラスバンドの曲の一部にはパート間で拍子の異なる楽譜になっていることがあります。指揮者がいる音楽形態ということもあり、多くの場合は二拍子、三拍子、四拍子の系列は同じで、拍の2分割と3分割の異なる拍子が同時進行するというものが多いです。

指揮



**4/4**

**12/8**



## 律動(6) シンコペーション(1)

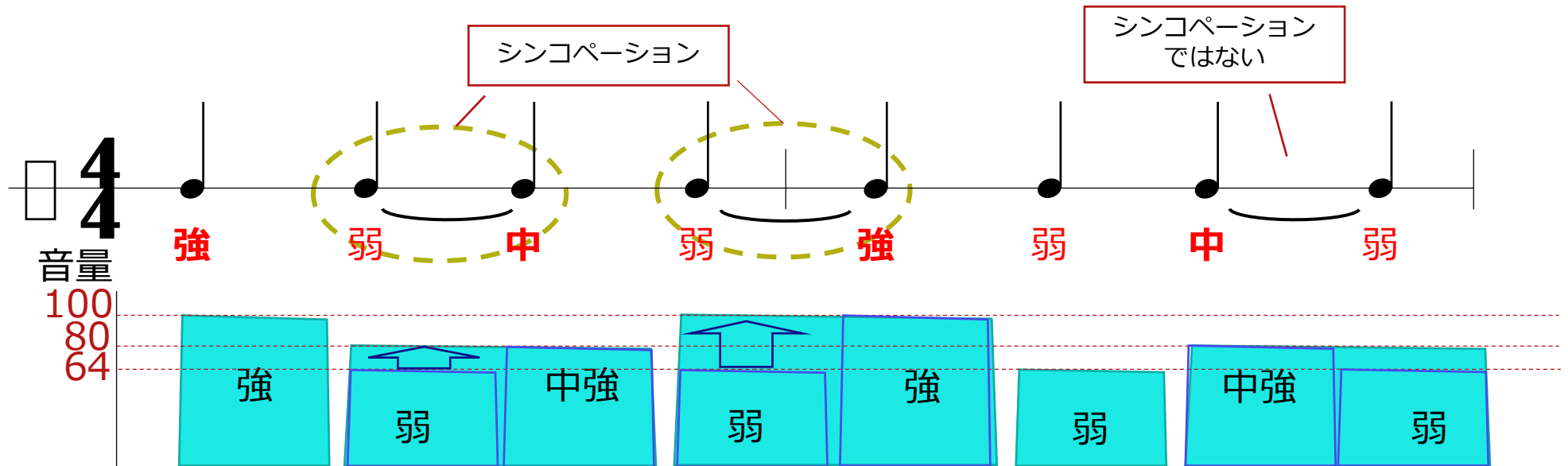


実際の楽曲では全ての拍に音があるわけではなく、タイで繋がったり、休符が挟まったり、各種表重記号がつくことで、より『音楽』になっています。

ビート（拍の強弱）が通常と異なるパターンになることをシンコペーションと呼びます。

典型的な例では、弱拍で始まる音符がそのまま途切れずに強拍にも演奏されているような部分などで。拍だけでなく、拍の裏から始まり次の拍の表に繋がるものも同様に呼ぶことがよくあります。

タイで繋がっているために弱拍にある音は、強拍と同じ音量で演奏する必要があります。



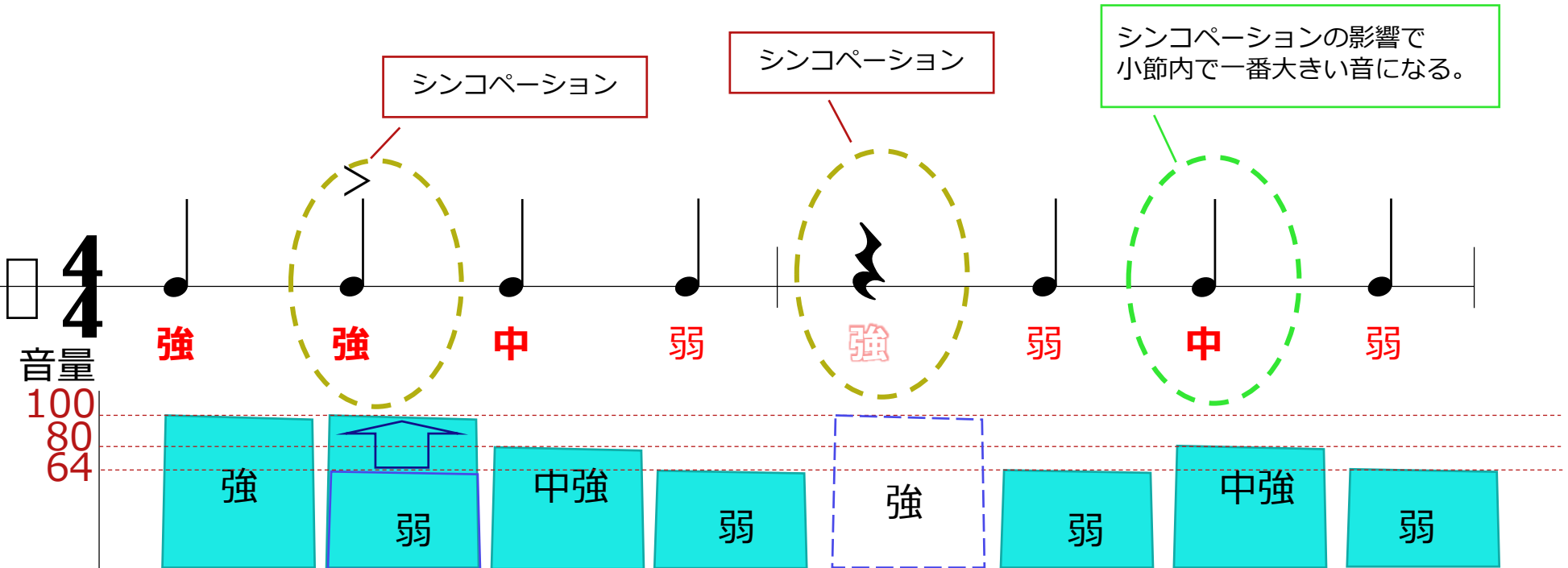




## 律動(6) シンコペーション(2)



強拍に存在するはずの音を演 しないことや、弱拍にアクセントがつき強拍化することで拍子のパターンが規則的でなくなります。これもシンコペーションの一つです。

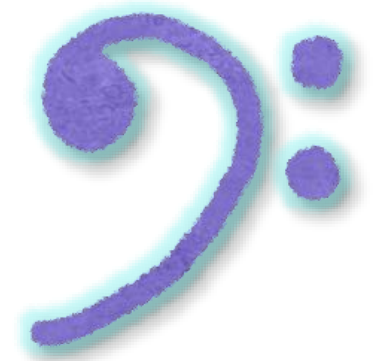


人は「あるはずのものが無い」と強い違和感を憶えて印象に残ります。強拍の休符は大切にしましょう。



ブラスバンドでかっこよく吹きたい

# 時代によるスタイルの変遷について





## スタイルの変遷について



ブラスバンドは19世紀中頃から様々な名曲を演奏しながら発展してきました。

その時代時代のスタイルに合わせて曲が書かれているので、作曲された時代に合わせたスタイルで演奏することでより高い効果を得られます。

傾向について大まかにまとめますので、演奏の参考にしてください。



## 1970年以前のスタイル



入手可能な音源があまりありませんが、手元にあるリマスター音源やYouTube等動画サイトで閲覧する限りでは下記のような特徴があります。

- 全体的にアタックが鋭く、音量のメリハリの大きい派手な演奏をしていることが多いです。
- 音色は楽器のせいもあるのですが、細い芯のある音色に、艶やかなエコーが載っているような独特の音色です。口の中を極端に狭くして鋭い息を高い圧で入れることで近い音色になります。
- 録音機器のせいかわかりませんが、本当にそういう音色だったのかわかりませんが、割れ気味の音色をしているところも多くあります。音程も悪いです。しかし、そこはまねる必要はなく、その裏にある演奏の狙いを再現することを考察するのがよいでしょう。
- チューニングピッチがやや低め(A=438~442Hz?)になっていることが多いです。今より全体的に管が細いものが多い、当時の使用楽器の特徴なのかもしれません。またすべての楽器が融和してオルガンのようになることを目指している感じがします。
- 参考
  - <https://youtu.be/AWU6xwn37LQ> 1934年
  - [https://youtu.be/tmQ85zO\\_IKM](https://youtu.be/tmQ85zO_IKM) 1960年
  - <https://youtu.be/l1y-gsx4zqI> 1963年



## 1970年～1990年あたりのスタイル



ブラスバンドの音楽が大きく変化した時代で、録音も盛んになり、入手可能な音源がたくさんあります。録音の品質も改善して、聴きやすい音源が増えています。

- ブラスバンドを昔からやっている人がブリティッシュスタイルを語るときはこの時代のことを指すことが多いです。本書のスタイル説明もこの時代のものをベースにしています。
- この時代の録音は音割れがほとんどなくなりますが、コルネットのサウンドが比較的甲高いものが多く、トロンボーンは重たい音色が好まれている傾向があります。
- 1970年以前の演奏と比較すると、セクションごとの音色の違いを意識した演奏や作品が増えている印象です。また音色は太くなり、楽器全体を響かすような音色になっています。
- ビブラートは1970年代後半をピークとして伴奏を中心にかかっています。時代を経るにつれおとなしくなっています。
- ピッチはやや低めですが、440Hzを下回ることはほとんどなくなっている印象です。
- 参考
  - <https://youtu.be/aLmjUQ3s-8o> 1970年
  - <https://youtu.be/ADRNH1cGtFg> 1972年
  - <https://youtu.be/o7xHoSp3sUo> 1974年
  - <https://youtu.be/2J-GwgXgu-E> [https://youtu.be/QbjXdL\\_gJKs](https://youtu.be/QbjXdL_gJKs) 1979年
  - <https://youtu.be/Pyt5f65PlcQ> 1981年
  - <https://youtu.be/4LfBgt-3C-k> <https://youtu.be/RCqj8Lp1Vu8> 1985年



## 1990年以降のスタイル

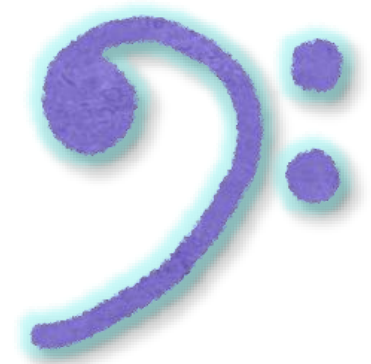


ブラスバンドの録音が国境を越えて流通することも増え、コンテストもイギリス1強ではなくなるにつれサウンドがグローバル化し、ブリティッシュスタイルの特徴が次第に消えつつあります。

- 作曲される楽曲が、調性や拍子が複雑・難解化し、ストレートトーンでビブラートなくはっきり演奏することを期待したものが増えました。
- サウンドは明るくなり、雑味が減って各奏者の演奏を聞き分けることが可能ぐらいクリアなサウンドが作られているところが増えました。
- 大きな音量よりも小さなミュートサウンドの美しさを要求されることが増えています。
- 参考
  - <https://youtu.be/9u7JBILdOoY> 1990年
  - [https://youtu.be/WCq2\\_wS4wzU](https://youtu.be/WCq2_wS4wzU) 1992年
  - <https://youtu.be/TsRcBue8G-U> 1998年
  - <https://youtu.be/wM46eetfvN8> 2001年
  - <https://youtu.be/nL6H-JQOWMI> 2004年
  - <https://youtu.be/CbEFNIWvsni> 2010年
  - <https://youtu.be/lIPj1XwxV5U> 2014年
  - <https://youtu.be/9rMAID0045U> 2016年



# 著名バンドの紹介





## 著名なバンド “Black Dyke Band”



1816年、ヨークシャー州クイーンズヘッドでPeter Whartonが設立した吹奏楽団がルーツ。しばらくの間、吹奏楽団として活動していたが次第に人数が減り行き詰まりました。1855年に同バンドのフレンチホルン奏者John Fosterが自身が所有する会社「Black Dyke Mills」で資金、練習場、ユニフォームを用意し、「Black Dyke Mills Brass Band」として19名で再結成されたのが由来です。

永らく同社がスポンサーとしてバンドを活動していたが、「Black Dyke Mills」社は経営難に陥ったため、1996年にバンドの資産について同社からバンドが買い取り、継続した活動が確保され「Black Dyke Band」として活動が継続されています。

イギリスを代表するブラスバンドとして長い歴史を持つため、コンテストの優勝回数も多く、国外ツアーなど非常に豊富な実績を持ち、ギネスブックへの「世界で最も成功しているバンド」としての登録などトップバンドらしいエピソードに事欠きません。

<http://www.blackdykeband.co.uk/>



**BLACK DYKE BAND**  
EST. 1855





## 著名なバンド “Cory Band”



ウェールズのRhondda Valley州で1884年に「Ton Temperance Band」として活動していたが、1895年にClifford Cory準男爵が興味を持ち、資金提供を受け「The Cory Band」となった。

1920年にはブラスバンドコンテストで優勝し、史上初のラジオ出演を果たしたとされている。

1984年、ブラスバンド結成100周年を記念したコンサートにてフィリップ・スパークに委嘱した「ドラゴンの年」を初演しています。

1998年、Just Rentals社よりスポンサー提供を受けバンド名を「Just Rentals Cory Band」に変更、スポンサー会社の社名変更に伴い「Buy As You View Cory Band」となり、「Buy As You View Band」となりました。

現在は再び「The Cory Band」と呼称しています。



<https://coryband.com/>



## 著名なバンド “Forden’s Band”



1900年にチェシャー州のエルワース村に結成されたバンドに起源があり、1903年頃に同村で起業したEdwin Fodenが「Fodens Motor Works Band」を結成しました。1908年までにバンドが再編成され、翌年にはチャンピオンシップ・セクションのバンドとなりました。

1950年代～1970年代にかけてFred MortimerやHarry Mortimerがバンドを指揮する中で数々の成功を収めています。

1986年、ブリタニア建築協会の支援を受け、バンド名が「Britannia Building Society Foden Band」から「Britannia Building Society Band」になりました。

1997年、楽器メーカーのコルトワの支援を受け「Fodens Courtois Band」となり、2004年にはRichardson Developmentsの支援を受けた。現在はスポンサー契約が終了したため「Foden’s Band」と名乗っています。

1992年のヨーロピアン・ブラスバンド選手権大会で演奏した「ドラゴンの年」は名演として有名です。



<https://www.fodensband.co.uk/>



## 著名なバンド “Leyland Band”



1946年、ランカシャー州レイランドで、トラックやバスを製造するレイランド・モーターズの職場バンドとして誕生しました。現在は独立したバンドとして活動しています。

スポンサーの変更によりバンド名は下記の通り変動しています。

- Leyland Motors Band (1946 - 1979)
- Leyland Vehicles Band (1979 - 1988)
- Leyland DAF Band (1988 - 1992)
- BNFL (Leyland) Band (1992 - 1997)
- JJB Sports Leyland Band (1997 - 2000)

同バンドは多くのCDを制作しており、丁寧で聴きやすい演奏をする傾向にあるので参考音源の宝庫でもあります。

<https://leylandband.co.uk/>





## 著名なバンド “Grimethorpe Colliery Band”



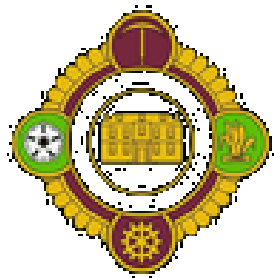
1917年に南ヨークシャー州グライムソープ炭鉱の職場バンドとして結成され、炭鉱からの補助金と炭鉱夫の寄付で活動していました。

1972年、プロの指揮者Elgar Howarthを迎えたところでバンドに転機が訪れ、新曲への挑戦、前衛的な楽曲への挑戦して、1974年にはイギリスBBCが主催する音楽祭「Proms」でブラスバンドとしては初めて演奏する機会を得ました。

サッチャリズム吹き荒れる1980年代に荒波をのりこえつつも、バンドを支援し多くのメンバーの職場でもあるグライムソープ炭鉱が1992年10月13日に閉鎖されました。ブラスバンドの最後の演奏として閉鎖4日後の10月17日に出場した「National Brass Band Championships of Great Britain」で「New Jerusalem」を100点満点で99点をたたき出す神がかった名演を見せつけ優勝しました。

その後、素晴らしいバンドを失ってはいけないと支援活動が広がり、スポンサーを得て活動を続けています。

この騒動は映画作品「[ブラス!](#)」(原題“[Brassed Off](#)”)として1996年に公開され高い評価を得ました。



<http://www.grimethorpeband.co.uk/>



## 著名なバンド “Brighouse & Rastrick Band”



1881年、西ヨークシャー州のカルダーデールにあるブリッグハウス区とラストリック村の住民たちの寄付により作られた市民ブラスバンドです。設立以来、一貫して寄付と基金により運営されています。

イギリスでは多くのバンドが職場バンドであるが、このバンドは日本の吹奏楽団とほぼ同じ形態であり、住民も自分たちのバンドが非常にいい演奏をするので、それを誇りに思っているそうです。

特筆すべきはシングル盤の全英チャートで最高2位の9週連続チャートインを達成したことがあります。(1977年「[Floral Dance](#)」)

1995年からバンドの練習場をブリッグハウス高校敷地内に「West Ridings」と呼ばれるホールを建て、そこにうつしています。同バンドは「[West Riding March](#)」をよく演奏するのでそれにちなむのかもしれませんが。(ブリッグハウス区を含む昔の州の名前が「West Riding of Yorkshire」です。)



<http://brighouseandrastrick.com/>



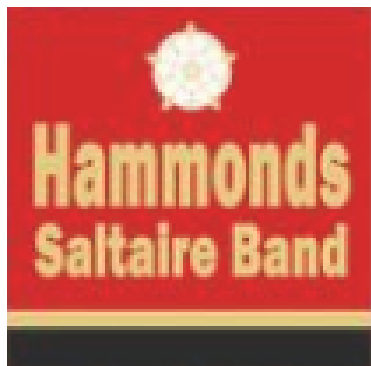
## 著名なバンド “Hammonds Saltaire Band”



1855年にSaltaire Bandとして西ヨークシャー州ブラッドフォードのソルタイアを本拠地として製塩工場の職場バンドとして結成された。1946年に「Hammonds Sauce Band」と改名しています。

スポンサーにちなみ、1993年から2004年まで「Yorkshire Building Society Band」、その後「YBS Band」と名乗って印象的な緑色のユニフォームで活動していたため、そちらの方がピンとくる人も多いのですが、2008年から「Hammonds Saltaire Band」です。

ヨークシャーを代表するブラスバンドの一つで、特にDavid Kingの指揮で数々の名演を生み出しており、ヨーロッパ・ブラスバンド選手権については1996～1997年、1999年～2004年の優勝バンドであり、同バンドがPhilip Sparkeに委嘱し演奏した「[Hymn of the Highland](#)」(2002年)や「[Music of the Spheres](#)」(2004年)などでは極めて高い評価を得て、その録音は今でも人気があります。



<https://www.hammondsband.org.uk/>



## 著名なバンド “Fairey Band”



イギリスの軍用航空機メーカーFairey Aviationの職場バンドとして「Fairey Aviation Works Band」として第二次世界大戦直前の1937年にマンチェスターで設立されました。フェアリーの製造した軍用機としてはFairey Swordfishが特に有名です。下部引用のバンドのロゴにも航空機が描かれているのはそれに由来します。

会社としてのFaireyは買収されて存在しなくなっていますが、一部部門がWilliams Fairey、Fairey Engineeringとして存続したことで、一時期その会社の名称を冠していた時期がありました。

印象的な水色のユニフォームを着て演奏します。特に1980年代前半はコンテストでも良好な成績を収めています。

<http://www.faireyband.com/>



Fairey Swordfish



*The Fairey Band*  
One of the World's Finest Brass Bands





## 著名なバンド “International Staff Band”



キリスト教の宗派の一つである「救世軍」(The Salvation Army)は、イギリスから広がったキリスト教団体です。伝道活動のためにブラスバンドを活用していて、年末に繁華街や大きな駅の近くで賛美歌をブラスバンドで演奏しながら「社会鍋」と呼ばれる募金活動を展開しています。

効率よく福祉支援活動をするのに指揮権を明確にした軍隊形式の組織となっており、活動各国のそれぞれの教会で佐官が兵士を指揮して賛美歌を演奏する活動をしています。

救世軍には本営という司令部組織が管轄エリアごとであり、本営に所属するブラスバンドを「～ Staff Band」と呼びます。日本には東京神田に救世軍日本本営があつてJapan Staff Bandが、アメリカ東部にはNew York Staff Bandが活動しています。全ての救世軍本営を束ねるロンドンの万国本営には「International Staff Band」が所属し、優秀な音楽家が集い、極めて質の高い演奏活動を展開しています。

楽曲についても神を称えるために、既存の賛美歌を含む新曲を積極的に作曲しており、非常に多くの優秀な作曲家と楽曲が誕生しています。吹奏楽で有名な作曲家も経歴を調べると救世軍所属の作曲家だったりすることは非常に多いです。

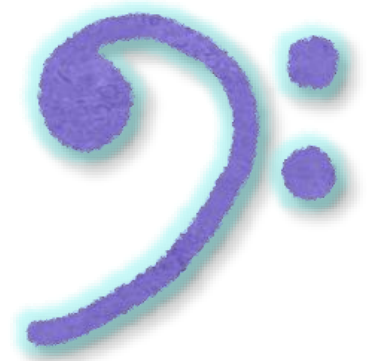


<http://www.theisb.com/>





# ブラスバンドのコンテスト





## ブラスバンドのコンテスト概要



日本に吹奏楽コンクールがあるように、ブラスバンドにもコンテストがあります。

共通の所も多いですが、日本の吹奏楽界と違うのは次のような点です。

- 優秀団体には賞金が出ます。  
コンテストには楽器メーカーなどのスポンサーがついており、上位数団体について順位に応じた賞金が支給されます。優勝トロフィーや盾をもらえるものもあります。
- 審査結果は完全公開です。  
賞金がかかっているからだと思いますが、審査員がだれで何点がついたのかも公開され、審査に手を加えたりするとばれてしまい、世間から非難されて交代させられます。
- 審査員は審査対象バンドの演奏順、現在演奏しているバンドを知ることができません。  
審査員は会場でカーテン越しに演奏を「覆面審査」します。  
演奏順は当日くじ引きで決まり、バンド名もアナウンスされません。舞台上にはエントリーナンバーが掲示されるだけです。



# Brass Band Championships

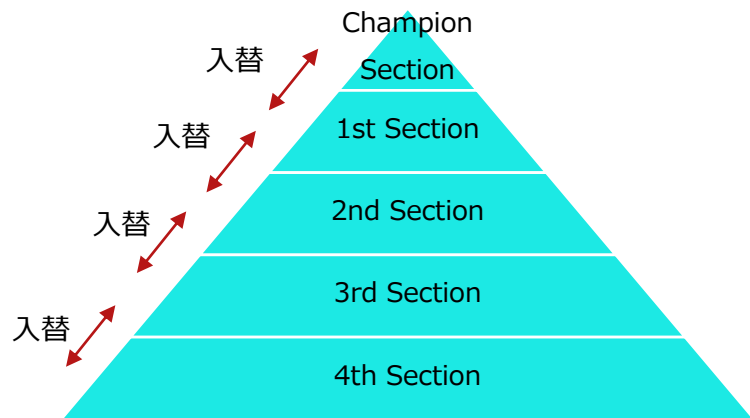


代表的なブラスバンドのコンテストとして「Brass Band Championships」があります。全英選手権は1900年から戦争による中断を挟みながら現在まで続いています。優勝すると大きなトロフィーがもらえます。

これまでの演奏レベルにより各バンドは「Champion Section」「1st Section」～「4th Section」に分かれており、各セクションはコンテスト成績により上位セクションまたは下位セクションと入れ替えが発生します。

各セクションごとに地区予選、各国予選(～ National Championship)があって、その上位大会として、ヨーロッパの優秀なバンドが集まりヨーロッパアンブラスバンド選手権が開催されます。

スポンサーに資金がある場合は、アメリカやオーストラリア、ニュージーランド等も含めて世界大会が開かれている年もありますが、近年はなかなかないようです。



全英選手権(The National Brass Band Championships of Great Britain)  
公式サイト

<http://www.nationalbrassbandchampionships.com/home>



## British Open Brass Band Championships



各国により事情は異なるものの、そこそこ熱心な国では通常の大会のほかにセクションの区切りを取り払った「Open Championships」が開催されています。

最も熱心なイギリスでは9月ごろに「British Open Brass Band Championships」が1853年から開催されていて、ここで優勝すると賞金と大きな盾がもらえます。



2015年のBritish Open  
グライムソープ・コリアリーバンド  
Webサイトより

ブリティッシュ・オープンの公式サイト  
<http://www.thebritishopen.net/>



## Whit Friday



イースターの後の第7日曜日は「ペンテコステの饗宴」というキリスト教で大切なお祭があり、そこから1週間、様々なお祭が模様されていました。特にイギリス北西部では今もその風習が残っており「ホワイト・マンデー」と称して遠足をしたり、草競馬をしたりします。

その金曜日には「ウィット・フライデー」(ホワイト・フライデー)と呼ばれる brass bands のコンテストがマンチェスターのサドルワースとティムサイドで開催されています。

街の中にチェックポイントが20箇所以上設けられており、それぞれのチェックポイントでマーチを演奏し、チェックポイントごとによかったバンドが勝利し、賞金がもらえるというものです。制限時間内であればいくつのチェックポイントを回ってもいいので、上手いバンドはたくさん回って賞金稼ぎをし、そうでないバンドは上手いバンドが回り残したチェックポイントを狙って回るというオリエンテーションとコンテストが合体したようなものになっています。

街中で展開するため、一般住民も巻き込んだ一大イベントとして市民に親しまれています。

公式サイト

<http://whitfriday.brassbands.saddleworth.org/intro.html>





## ブラスバンドの情報源



昔に比べて情報の入手は極めて容易になりましたが、それでもまだまだハードルが高いのが現実です。

役立つ情報源をいくつか紹介します。

### コンテスト結果

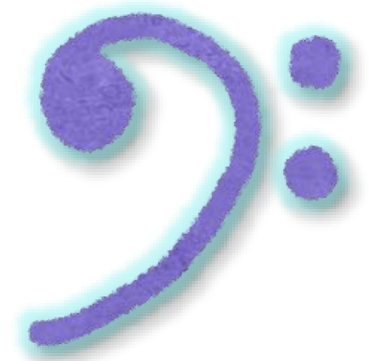
- Brass Band Results  
<https://brassbandresults.co.uk/>

### 主なブラスバンド関連ニュースメディア

- Brass Band World (紙媒体の定期購読が可能です。)  
<http://www.brassbandworld.co.uk/news>
- British Bandsman (紙媒体の定期購読が可能です。)  
<http://www.britishbandsman.com/>
- 4barsrest  
<https://www.4barsrest.com/>



# ブラスバンドの名曲たち





## ブラスバンドの名曲



ブラスバンドの歴史がとても長いので、非常に多くのレパートリーがあります。

録音が残っているものはこの2～30年のものが多いですが、それ以前のものも残っていたりして当時の演奏をうかがい知ることができます。

コンテストピースやソロピースを中心に比較的人気のある楽曲を紹介します。  
載せてないものにも良曲はいっぱいありますが、少なめに厳選して載せてあります。

なお楽譜は下記で購入するのが簡単でお勧めです。

Just Music

<https://www.justmusicuk.com/browse>

古い楽曲(1881～1956)の当時の記録を調べるのに役立つ、サルフォード大学のWright&Round Brass Band Newsの公開アーカイブはこちら。

<http://usir.salford.ac.uk/journal/BBN/>





## 昔から愛され演奏され続けているコンテストピース



曲名	作曲者	補足
Labour and Love	Percy Fletcher	1913年の全英選手権の課題曲 初の本格的なオリジナル課題曲
Life Divine	Cyril Jenkins	1921年の全英選手権の課題曲
Freedom (Brass Band Symphony No. 1)	Hubert Bath	1922年の全英選手権の課題曲
An Epic Symphony	Percy Fletcher	1926年の全英選手権の課題曲
A Moorside Suite	Gustav Holst	1928年の全英選手権の課題曲
The Severn Suite	Edward Elgar	1930年の全英選手権の課題曲
Kenilworth	Arthur Bliss	1936年の全英選手権の課題曲
Pageantry	Herbert Howells	1934年の全英オープンの課題曲
Resurgam	Eric Ball	1950年の全英オープンの課題曲
Festival Music	Eric Ball	1956年の全英選手権の課題曲
Salute to Youth	Gilbert Vinter	1960年作曲、1962年英地区大会課題曲
Journey into Freedom	Eric Ball	1967年の全英選手権の課題曲
The Land of the Long White Cloud – Aotearoa	Philip Sparke	1980年の全欧選手権の課題曲
Blitz	Derek Bourgeois	1981年の全英選手権の課題曲
The Year of the Dragon	Philip Sparke	1984年作曲、1986年全欧選手権課題曲
The Essence of Time	Peter Graham	1989年作曲、1990年全欧選手権課題曲
Cambridge Variations	Philip Sparke	1992年全英マスターズ課題曲



## 最近のコンテストピースほか、人気のある大曲(1)



曲名	作曲者	補足
Excalibur	Jan van der Roost	
Canterbury Chorale	Jan van der Roost	
Toccata Festiva	Jan van der Roost	
A London Overture	Philip Sparke	
Harmony Music	Philip Sparke	
Hymn of the Highlands	Philip Sparke	
Jubilee Overture	Philip Sparke	
Music for a Festival	Philip Sparke	
Music of the Spheres	Philip Sparke	
Orient Express	Philip Sparke	
Gaelforce	Peter Graham	
Harrison's Dream	Peter Graham	
Journey to the Centre of the Earth	Peter Graham	
Metropolis 1927	Peter Graham	
On the Shoulders of Giants	Peter Graham	
Shine as the Light	Peter Graham	
Windows of the World	Peter Graham	
A Disney Fantasy	Goff Richards	



## 最近のコンテストピースほか、人気のある大曲(2)



曲名	作曲者	補足
A Saddleworth Festival Overture	Goff Richards	
Calling Cornwall	Goff Richards	
Hollywood!	Goff Richards	
Oceans	Goff Richards	
Rock Music III	Goff Richards	
Voyage of Discovery	Goff Richards	
Fantasy On British Sea Songs	Gordon Langford	
Saddleworth Festival Overture	Gordon Langford	2019年炭鉦バンド4th Section課題曲
Riverdance	Ray Farr	
Enter the Galaxies	Paul Lovatt-Cooper	
Fire In The Blood	Paul Lovatt-Cooper	
Vitae Aeternum	Paul Lovatt-Cooper	
Devil and the Deep Blue Sea	Derek Bourgeois	
First Suite in E ♭	Gustav Holst	2019年英地区3rd Section課題曲
Second Suite in F	Gustav Holst	2018年炭鉦バンド4th Section課題曲



## 楽器別 ソロ曲の例(1)



ソロ楽器	曲名	作曲者 / 編曲者
Soprano Cornet	Demelza	Hugh Nash(Goff Richards)
Soprano Cornet	Flowerdale (from Hymn of the Highlands)	Philip Sparke
Soprano Cornet	Memory From "Cats"	Andrew Lloyd Webber / Alan Catherall
B ♭ Cornet	Cleopatra	Damare
B ♭ Cornet	Fantaisie and Variations on "The Carnival of Venice"	Jean Baptiste Arban
B ♭ Cornet	Hejre Kati	Hubay, R. Mendez / Leigh Baker
Flugel Horn	Pie Jesu	Faure / Bram Gay
Flugel Horn	Share My Yoke	Webb / vor Bosanko
Flugel Horn	CAMILLE	Andre Waignein
Tenor Horn	A Time for Peace	Peter Graham
Tenor Horn	Lark in the Clear Air	Traditional / Gordon Langford
Tenor Horn	Over the Rainbow	Arlen & Harburg / Goff Richards
Baritone	Broken Melody	Van Biene / Steven Booth
Baritone	Carrickfergus	Traditional / Stephen Roberts
Baritone	The Holy Well	Peter Graham



## 楽器別 ソロ曲の例(2)



ソロ楽器	曲名	作曲者 / 編曲者
Trombone	Ash Grove	Gordon Langford
Trombone	Dance Sequence	Gareth Wood
Trombone	The Flying Slide	Ethan Thompson
Bass Trombone	Lazy Bones Blues	John Phillips
Bass Trombone	Proclamation	Gordon Langford
Euphonium	Pantomime	Philip Sparke
Euphonium	Harlequin	Philip Sparke
Euphonium	Midnight Euphonium	Goff Richards
E ♭ Bass	HOOK (from Homage to the Noble Grape)	Goff Richards
E ♭ Bass	Swiss Air	Roy Newsom
E ♭ Bass	The Sun Has Got His Hat On	Butler & Gay / Philip Sparke
B ♭ Bass	The Farmer's Fair	Derek Broadbent
B ♭ Bass	Forty Fathoms	Harold L. Walters
Xylophone	Helter Skelter	W. Lemon / Ray Woodfield



この資料書くのに協力してくれた全ての方、ともに演奏してきた仲間や指導者、ブラスバンドのことをいろいろ教えてくれた先駆者達に感謝いたします。

特に本書の完成に深くご協力いただいた次の方々へは深い感謝の意を表します。

執筆の必要性を最初に理解して後押ししてくれた 畑中留美子さん

執筆の途中で折れそうになったら励ましてくれた 野原美佐紀さん

書くという行動のきっかけを与えてくれた 右田裕丈さん

本書の構成に有益なアドバイスをくれた 柿田智行さん

不足情報の穴埋めを協力してくれた小田剛史さん、石田知久さん

本書の執筆に際し、ライセンス範囲内または個別許諾により著作物を利用させていただいております。感謝とともにご紹介いたします。

いらすとや

株式会社ヤマハミュージックジャパン

またソフトウェアおよびカラオケ機器の画面は各社に権利があり、引用させていただいております。

2019年3月  
森末 吉彦